

女子國文 卷二

375.9
H07
資料室



42149

教科書文庫

4
810
42-1918
20000 53172

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

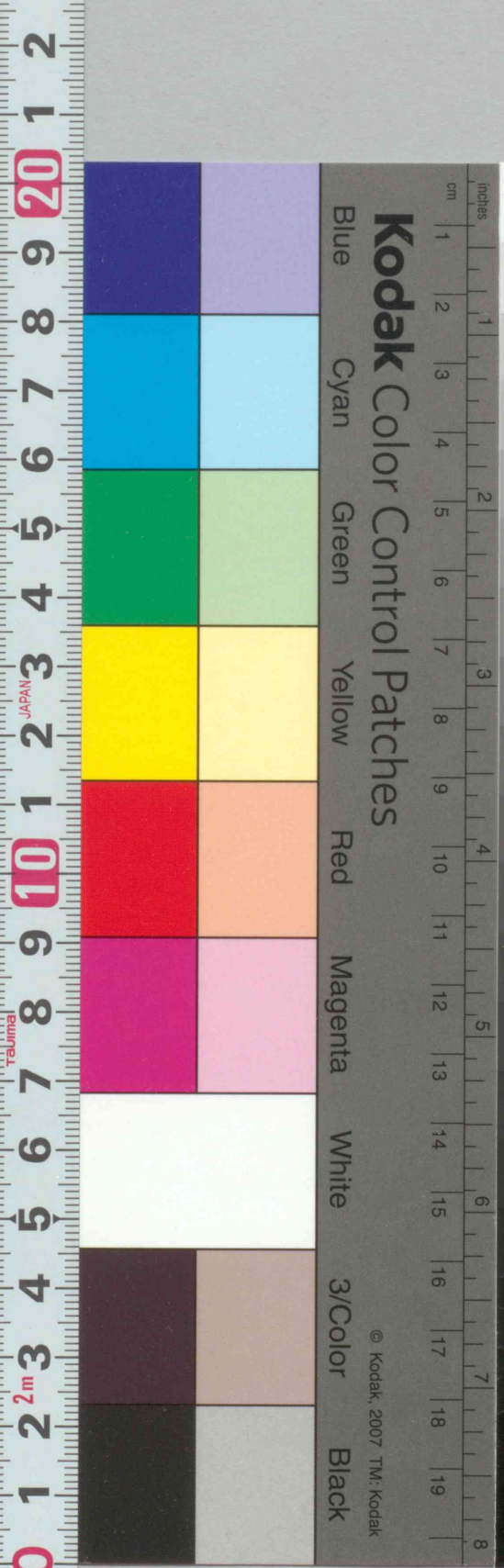


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室 375.9

校學女等高 濟定檢省部文 年日 七 月 大 二
書用科教科語國



祭 雛

女子國文

文學博士芳賀矢一編

東京 富山房發兌



女子國文卷二

目次

一 農家の春秋	一頁
二 蟻	九
三 心の儘になるならば(韻文)	一六
四 花の香	一九
五 遠足の後友の許へ(書簡文)	二四
六 汽車の旅(二)	二七
七 京都	三三
八 女帝ピクトリヤ	三六

九 西洋の家庭(自修文)……………三

一〇 行儀作法……………四

一一 書物を借りに遣はす文 同返事(書簡文)……………五

一二 河村瑞賢……………五

一三 初雪……………六

一四 盾の両面(自修文)……………六

一五 紀州蜜柑……………七

一六 歳末の十日……………七

一七 歳暮(韻文)……………七

一八 日章旗……………七

一九 國歌……………八

二〇 伊勢神宮……………八

二一 類似せる東西の諺……………九

二二 百人一首物語……………九

二三 雪國の冬 其の一……………九

二四 雪國の冬 其の二……………一〇

二五 雪物語(自修文)……………一〇

二六 學校記念日……………一〇

二七 伊能忠敬……………一〇

二八 憲法發布……………一〇

二九 おはやの失敗(自修文)……………一〇

三〇 佛蘭西の一老兵の子……………一〇

三一	安宅	一三三
三二	櫻花のヒ首	一四二
三三	雛祭の記	一四五
三四	汽車の旅(三)(自修文)	一四九
三五	ビールとマリブラン 其の一	一五三
三六	ビールとマリブラン 其の二	一五七
三七	品性と常識	一六二

目次終

女子國文卷二

毛附
毛上

一 農家の春秋

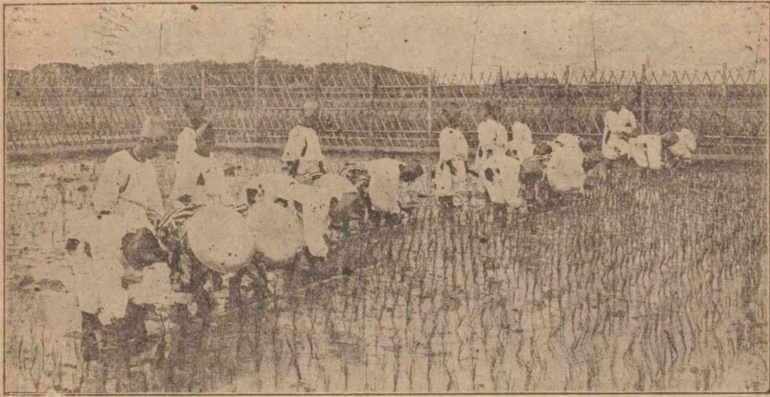
毛附、毛上と云つて、農家の特に忙しい時が春と秋
 とに二度ある。春は麥を刈取つて田を作る準備、秋は
 稻を取入れて麥を蒔くこしらへ。此の両度の時季が
 農業の骨折時である。

六月に入るとだん／＼暑くなる。ねむさうな聲で
 蟬が鳴き始める。苗代の苗が延びる。麥の穂が赤らむ。

夏至

彼是するうち梅雨になるから、それ迄に麥を取入れなければ腐らせてしまふ。二十一二日は夏至で、其の前後一週間程のうちに、田植もしなければならぬ。夜は短くなる。蚊が出て来る。農家の此の時分の忙しさ。雨上りには麥畠がまだじく／＼して居る。併し季節は待つてくれないから、小さい笠を被つて刈始める。雨上りの土が草鞋に附く。足は重い。鎌が切れなくなる。疲れに疲れて、眞晝には眼も眩む位である。都會の人はからころと下駄ばきで、團扇片手に暑くなつたと言つて居る頃である。麥はやう／＼刈入れた。一家

疲れに疲れて眩む



大正御大典悠紀齋田御植

の田地何町歩あつても、此の一週間のうちに田植をしまはねばならぬ。そこにも、此處にも、勇ましい田植歌が聞える。明治天皇の御製に、

燕飛ぶ影のみ見えて田植時

家に人無き小山田の里

一村かくの如く賑つて、二十

五六日頃には一面の青田。青葉の山も晝のやうに映つて居る。

二三日打通
しての

刺し

これでまづ一安心と、二三日打通しての毛附休。餅も
搗き、御馳走もする。都會の人は狭くるしい家の内で、
電車の軋る音を聞いて、馬車馬や自動車の塵を吸つ
て居るのである。

(一) 暮末の女歌人
太田垣蓮月の
詠

案山子

(一) 小山田の霧の中道ふみ分けて

人來と見しは案山子なりけり

風が吹いても、雨が降つても、案山子は田の中に立
盡して居る。ふと見れば眞の農夫が立つて居るやう
で、驚くものは鳥獸ばかりでない。

農夫は實に案山子其の者である。粗衣粗食で、年が

稼穡
忙殺

上御一人

(二) 明治天皇御
製

民草

年中田畑に出て、稼穡の爲に忙殺せられて居る。二百
十日頃の心配は一通りでない。此の頃はちやうど中
稻が穂を出す時分で、大風が一度吹かうものなら、そ
れこそ夏中の辛苦艱難も皆無になつてしまふので
ある。我が國は古來農の國である。心配するのは農夫
ばかりで無い。恐多くも上御一人におかせられても、
照るにつけ曇るにつけて思ふかな

我が民草の上はいかにと

と御心配遊ばされるのである。

此の恐ろしい二百十日、二百二十日の厄日が過ぎ

小春日和

ると、やがて天氣も固まつて、九、十、十一と三箇月は、秋晴玉の如き小春日和となる。稻は此の間に早稻、中稻、晩稻みくと順々に實のつて行く。

取入が始ると、こゝに又農家第二回の多忙な時節となる。日は一日々々短くなる。早く取入れて又麥を蒔かねばならぬ。其の忙しさは、田植時分の比でない。田植の仕事は、何といつても水仕事である。田を鋤いて水を入れ、これに稻の苗を植ゑるのである。稻は水生植物であるから、少々雨が降つても、風が吹いても、田植が出来る。まして時候が時候だから、水田の仕事

鋤く

夜を日に繼ぐ

は却つて心地がよい位である。

然るに稻刈の時は、刈つた稻を濕してはならぬ。雨の降らないうちと、夜を日に繼いで働く。つらいのは麥蒔で、十一月下旬から、十二月上旬にかけて蒔く。日が短いから、半分は夜業である。夜は十時、十一時頃まで野で働き、朝は又四時頃から起きて行く。やつと暖くなつた寢屋を捨て、眼を擦りくく出て行く。鎌のやうな有明の月が西の空に懸つて居る。まだ夜が明けない。鍬で土くれを撃つと、刃が小石に中つて發矢と火花が出ることもある。遠近とちに牛のうなり、馬の嘶いななき

眼を擦り擦り

有明の月

發矢

山際

焚火

夢路をたどる

が聞える。人聲もする。こゝもかしこも麥蒔である。
 六時頃日が出る。山際の雲が晴れて、東の空がうす
 明るくなつた頃の冷たさ。地の凍るのも此の時分
 ある。堪兼ねて遠近に焚火するのも見える。
 思ふに、農家一年の中、此の季節ほど心せはしく、且
 苦しい時はあるまい。都の人々は未だあたゝかい夢
 路をたどつて、電車も通らなければ、牛乳配達の車も
 通らぬ時分、田舎は人々皆目ざめて働いてゐるので
 ある。我等が毎日口に入れる米や麥、只の一粒も容易
 に出来たものではない。

二 蟻

阪本四方太

寫生文

今しがた

俄雨は今しがた霽れて、處々に綿のやうなちぎれ
 雲が浮いて居る。庭におりて、何を見るときもなしに立
 つて居る中、ふと蟻の穴が目に附いた。

暫くしやがんで見て居ると、今は雨後の修繕と見
 えて、どの穴でも工夫が頻りに土くれを外に運び出
 して居る。工夫は身の長三分ばかりの大蟻で、土くれ
 をくはへて出ては適宜の處に投げて歸る。すると、他
 の大蟻が其の跡からくはへて出る。一つの穴に十匹
 ぐらゐ働いて居るので、此の時はや幾らか蟻垤アリノツツの形

蟻垤

取りも直さず

が出来た。蟻埴といふのは、彼等の頭より遙に大きく、さうして、重い土くれの集りて、取りも直さず工夫の油汗を流して持出したものである。

ぬき足さし

何かくれてやるものは無いかと思つて、そこらを見廻すと、後の菊の葉に大きな蠅が止つて居る。ぬき足さし足近寄つて、手をさし伸べて捕らうとすると、蠅はふういと飛去つた。しくじつたと思ひながら、息をこらして窺ふと、今度は前よりも一層要害な葉の上^にに止つて、「こゝまでお出で。」といつたやうに身構へた。さうして、両手を揉んで、頻りに頭を撫でて見せる。

要害

警戒

「おのれにくい奴め。」と思つたが、前の失敗に懲りて、今度は警戒に警戒を加へて、じり／＼と詰寄つた。こちらの武器は只爪一つなので、満身の力を爪先にこめて、ぴちんと弾くと、手答慥かに命中した。蠅は三尺先の大地にのけぞり返つてもがいて居る。早速蟻に投げてやると、さあ大騒ぎだ。蟻が出て来て引張り込まうとする。蠅は片足踏張つて、引かれまいとする。いよ、いよ、蠅と蟻との相撲が始つた。したゝか争つて居るうち、蠅は痛手に疲れてくる。蟻は加勢が出てくるといふので、蠅はとうとう穴に引張り込まれた。まづこれ

命中

したゝか

死力を出す

で安心と思つて居ると、再び蠅の頭がにゆうつと出て来たのには驚いた。其の内に力も盡きたと見えて再び引張り込れた。今度は、幾ら待つて居ても出て来ない。蠅は實に死力を出して争つたのである。蠅とはいへ、あつばれな最期であつた。

生憎

自分はまだの面白さに、もつと蠅は居ないかと、あちこち探した。菊島に蠅殺があつた。といふ噂でも立つたのか、今度は蠅の影さへも見えない。そこで蜘蛛はどうだ、蜂の巢はないかと、残るくまなく尋ねまはつたけれども、生憎何も居ない。座敷に上つて、蠅を

精進

狩始めたが、やつぱり捕れない。せん方なく、臺所につて、飯粒と麩の切とを取出して、これを蟻の穴の口に分配した。すると、一時は蟻も驚いたやうに、二匹づつ寄つて来て、上つたり下りたりして居たが、しまひには鼻突合せて相談を始めた。精進はいやだね。今少しひまな時ならまだしもだが、人間の氣が利かないにも困つてしまふ。といふやうな風で、もう見向もしない。例の開鑿に熱中して居る。自分も大分飽きて来たので、いたづらを始めて、巻煙草の灰を穴に落した。すると、蟻は其の穴からは出入をやめて、他の穴か

開鑿
熱中

連絡

ら出て来る。そこでいよいよ内部の連絡して居る事がわかつた。次に穴を皆砂で埋めてしまつた。すると蟻どの我慢がしきれなくなつたと見えて、ぼつくと土を持ち上げはじめた。

此の時、天から降つたか、地から湧いたか、數千の蟻が知らぬ間に庭の彼方に眞黒に集つた。其の擴がりには凡そ直徑二尺ばかりの圓形をなして居る。やがて此の蟻の群が運動を始めて、自分が先程まで見て居た蟻埵に近づいた。近づいたと思ふと、數十の蟻が矢庭に蟻埵に突入した。他の蟻も我もくとそこに向

突貫

つて走つた。まるで軍隊の突貫と同じだ。殆どみんなはいつてしまつて、残が僅かに十四五匹になつた頃に、先登の蟻が白い繭の様な形をした卵を咬へて驅出して來た。續いて二匹三匹と驅出して、それから跡は、出るともく、潮の涌くが如くに出て來た。てんで白い卵を持つて居るからをかしい。運動會の提灯競走はこんなに入敷が多くない。祝賀會の球燈行列はこんな活潑でない。實に庭内の一大奇觀である。先登ははや庭を横ぎつて、隣の庭の草むらを踏越え、くゞり抜けて行く。皆々續いて行く。どこまで行く

掠奪

かと、首を伸して見て居ると、隣の庭も横ぎつて、遙あなたの胡瓜畠の方へ行つてしまつた。これは多分遠征軍の掠奪とでもいふのだらう。折から座敷の時計が四時を打つた。此の掠奪は僅か四五分間に終つたのである。蟻垤はひどく荒されて、工夫等は何處へ行つたか、終に一匹も見えなくなつてしまつた。

——ほととぎす——

三 心の儘になるならば 武島羽衣

夕の空を 眺むれば、

浮きて漂ふ むら雲を、

むら雲

峰の嵐に はらはせて、

輝き出づる 望の月。

望の月

心の儘に なるならば、

取りて、飾りて、 我が母の

朝の鏡に まるらせん。

あしたの野邊を 眺むれば、

小草、若草、 百千草、

唯ひとつらに 生ひたちて、

寝よげに見ゆる あを錦。

心の儘に なるならば、

百千草

一面に

ひとつら

寝よげ

三 心の儘になるならば

一七

ねやに移して 父上の
 夜のしとねに まゐらせん。
 かどの小川を 眺むれば、
 小さく、優しき 音立て、
 流るゝ水の 其の上に
 散りて浮べる 星の玉。
 心の儘に なるならば、
 取りて、連ねて、 我が姉の
 髪のかざりに まゐらせん。
 遠きかなたを 眺むれば、

虹の綾

赤、青、紫 とりまぜて、
 色麗しく 染めなされ、
 高くかゝれる 虹の綾。
 心の儘に なるならば、
 取りて仕立て、 妹の
 晴着の帯に 與へてん。

— 國語讀本 —

四 花の香

三 好 學

普通の花の中で香の高いのは木犀キスシであらう。
 十月上旬此の花が咲くと、四五町も隔つて居る遠

芳香を含む

方から知れる。沈^{せん}丁^{てい}花^げなども、一町位の遠方まで香が傳はる。又おほやまれんげ^{はれのき}、厚朴^{こうぼく}の類でも、花が咲くと、其の周囲の空氣は一種の芳香を含んで來る。梅も亦香の高い花で、咲揃つた時は、近所の空氣が風の吹く度に佳い香を送つて來る。櫻の花は一般に餘り匂はぬものであるが、山櫻の種類で香氣の強いものがある。其の名を匂櫻といふ。

あつさり

匂櫻は東京では四月下旬に咲くので、他の櫻よりも花期が遅い。花は大抵一重で、あつさりして赤い葉と打交つて咲く。此の花の盛のときは、周圍一町位の

遠方迄も香氣が傳はつて來て、花のありかが知れる。また樹の上には數多の蝶や蜂が來て、花に群集して居るのが見える。櫻の花の香の事は、昔から和歌にも多く出て居て、

けふもまた雲とや見まし山櫻

にほひを送る風なかりせば

また、

山櫻霞にもるゝにほひこそ

咲きぬと告ぐる使なりけれ

などとあるが、これらは皆山櫻を詠じたものである。

しかし、山櫻の香は此の匂櫻に比べると至つて少い。匂櫻のやうに色も香も備つて居るものは、色ばかりで誇る他の櫻よりも、一層高尚で、且優美に感じられる。

花には自ら時刻によつて香の出るものがある。尤も多くの花には何時でも絶えず馨つて居るものもあるが、また中には此の様に時刻をきめて匂ふものも少くない。前年自分が、爪哇ジャバの或植物園で観察した石斛シキの一種に屬する蘭科植物の花は、朝の十時頃に、いつも佳い香が出た。其の頃になると、ちやうど蟲が

〔Java、東印度諸島の一。〕

來て花を訪うて居るのを見た。此の外にもなほ、時間によつて香の出る花が色々ある。例へばマンテマの類は、夜になると佳い香がする。これは其の頃に特別の昆蟲が花を訪問するからである。

植物には又、枯れた後に香の出るものもある。例へば獨逸、墺地利などの森林で普通に見るワルドマイステルは、八重葎ヒトコに似た草で、花には一種クマリン性の香氣がある。此の植物の葉や莖を取つて酒精に入れて置くと、同じ香氣が一層強く出て、酒精に香がつく。又海藻などの中にも、枯れた後に同様の香氣を發す

酒精

るのがある。櫻の葉からも、死後に同様の香が出る。東京では櫻の葉を鹽漬にして櫻餅を作る。其の鹽漬の櫻の葉に強い香氣のある事は人が知つて居る。これは即ちクマリン性の香氣である。 — 植物生態美觀 —

五 遠足の後友の詩へ

すみみさん 昨夜も御座いますか此の間私
の学校では秋季の遠足會がありました。本牧岬へ
参りました横濱の原さんといふお方の御別荘へ
ゆるい遊ばせていただきましたが後は山前は海

本牧岬は横濱市の東南方海中に突出す

目黒不動寺、寺名は龍泉寺、東京の郊外目黒村。

高雄は京都の郊外、即ち山城國葛野郡にある山。

祇園は官幣大社八坂神社のこと。京都の京區清井町下

誠に面白い変で知らぬ間に歸の時間が来て残念に思ひました。もう帰つたのは五時少し過ぎて、すみみさん、去年のちやうど今日みんなで目黒の不動寺へ遠足に連れて行つていただき、またたねあの時は小さい紅茶の木を大事に持つて歸つてお庭に植えた事を覚えてもらい、やみせう、今年には西京に別れまうたが此の秋は定めて高雄とかの紅茶木にもいらつとやあそびたい、いませう、其の節はどうか御様子をお知らせ下さいませ、先達てのお手紙、祇園や清原の事が書いて

清水は京都洛
東。阪上田村
磨の建てし清
水寺あり。

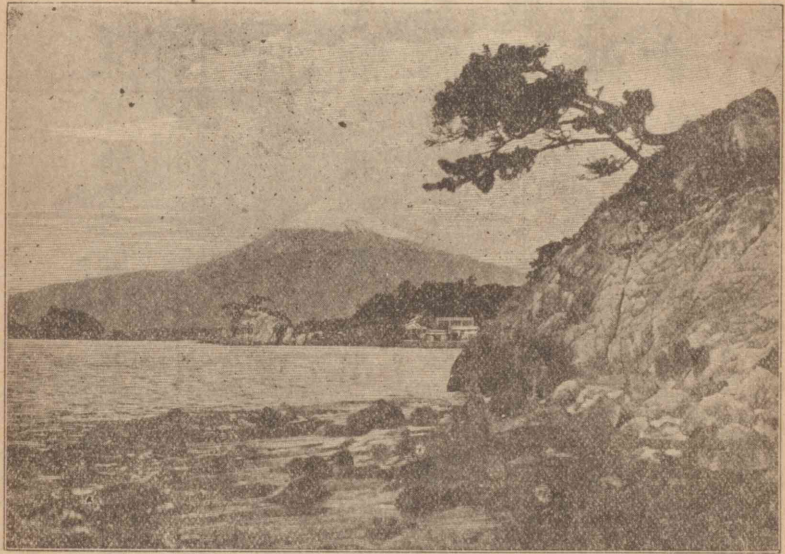
南座いまだ私が私も一度は行って見た。南座
まゝり存す。た松田さんも河原さんも南座まで
毎日南座に通つていらつやいます。あ、もう一度
あかたは由一緒に遠足に行つて見た。思ひます
本牧でも皆さう申してあかたの南座が随分出
まゝた別封は記念の繪巻書で南座いまだ右の
方に思ふる家のあたりが私共の遊んだ處で由座
います。さうかおからたを南大切に遊ばしてをり、
お手紙を下さいませ。さやうなら

六 汽車の旅(二)

東京から京都まで、昔ならば江戸からの都上りで、
十日路の長旅であつたが、今は急行の下り列車で、十
二時間で行ける。東洋第一の大停車場といふ東京驛
を、朝の八時半に出立、品川あたりで、東京灣の景色
を眺めつゝ行けば、いつしか「横濱、横濱」と呼ぶ。神奈川
縣廳のある所で、日本一の輸出港。さすがは、外國人の
乗降が多い。大船からは鎌倉、横須賀へ行く支線があ
り、藤澤は江の島へ行く近道である。馬入川の鐵橋を
通つて平塚、大磯、此のあたり一帯の地は海水浴場と

(一) 五いづれも
相模國。
(六) 一名相模川の
甲斐國桂川の
下流。
(七) 六いづれも
相模國。

(一) 相模國。駿河との國境にあり、高さ二四四二尺。
(二) 相模國。



沼津附近の富士

して名高く、貴紳、豪商の別荘が多い。
二時間て國府津(一)に着く。昔の東海道の箱根路(二)を通るには、こゝで汽車を下りなければならぬ。汽車は眞直に足柄山(三)にかゝつて、山北驛では、後先に機關車をつける。トンネルを出ると又トン

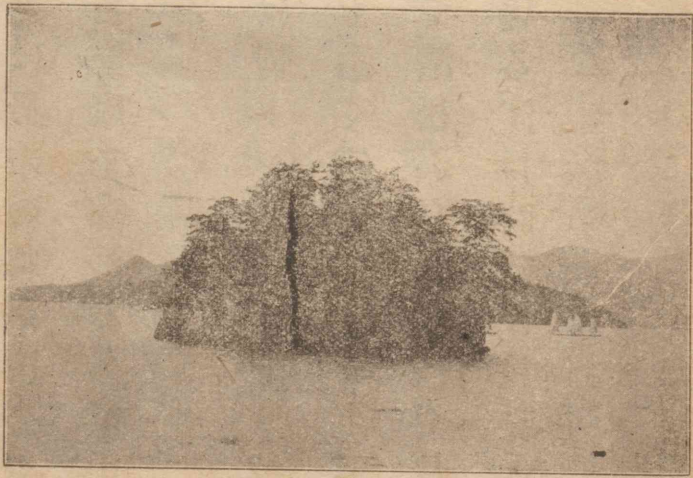
溪流

(三) 駿河國。

雄大崇高

ネル、溪流に架けた鐵橋をいくつともなく越えて、沼津(三)には五分間の停車。

此のあたりの富士の眺の美しさ、雲間に抜け出た雄大崇高な姿は、日本一はおろか、世界一の名山との感を起さしめる。人間は、如何に答へん言の葉に及ばぬ富士の雪の白妙(四)。と其の昔琉球人の詠んだのも、げにとりなづ



富士名湖

(三) 駿河國。

(四) 駿河國。

(五) 遠江國。

(六) 甲斐國より

來る。所謂日

本三急流の

(七) 甲斐國白根

山に發し駿河

と遠江との境

を流る。

(八) 信濃國諏訪

湖に發し遠江

國の中央を流

る。

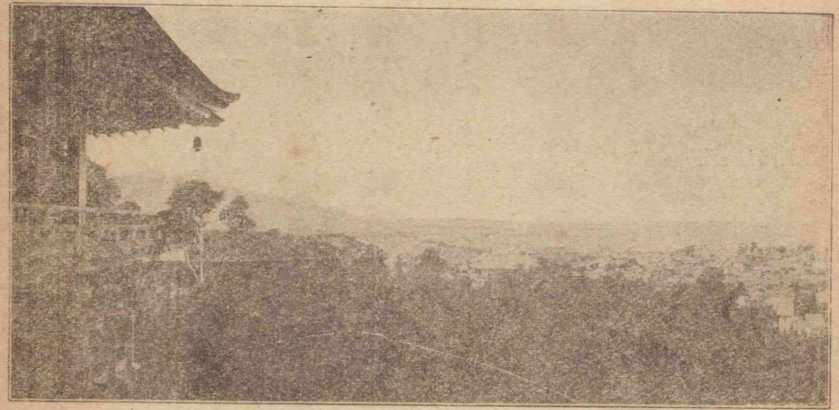
(九) 遠江國。

かれる。静岡(三)は縣廳の所在地で、徳川家には縁の深い所。初代の將軍家康はこゝで死に、最末の將軍慶喜も、永らくこゝに退隱して居つた。家康を葬つた久能山は此の市の東南二里餘に在る。

(四)うつの山も、(五)小夜中山も、今は皆トンネルで通り抜け、(六)富士川も、(七)大井川も、(八)天龍川も、悉く鐵道で樂々と渡る。天龍川を渡つた所が濱松(九)で、濱松から間も無く昔の濱名の湖、今は海と續いて居る。江戸時代にはこゝに關所があつたのである。

東京から僅か八時間半で、名古屋に着く。愛知縣廳

(五) 美濃國。



三井寺より琵琶湖を望む

の所在地で、両京及び大阪に次いで(三)の繁華な都である。汽車の窓から華やかな日光に輝く金の鯨(四)が見える。鐵道はこれから北へ折れて、岐阜縣に入り、間も無く岐阜に着く。

「岐阜はよい所、金華山の麓」といふ其の金華山の麓を流れる長良川は、鵜飼で世界に聞えて居る。大垣(五)の城を眺めて、關ヶ原

(二) 慶長五年九月石田三成と徳川家康との戦。

(三) 近江國。分岐點

(三)「ものゝぶ」の矢橋の渡ちかくとも急がばまはれ瀬田の長橋。

(四) 藤原秀郷。
(五) 近江國。一名近江富士。高さ一三〇〇尺。

(六) 蟬丸の歌。百人一首中にある。

を過ぎる時は、誰しも三百年昔の大戦争を想ひ起すであらう。青葉の中に彦根城の白壁も厳しく美しい。米原は北陸線の分岐點。汽車は琵琶湖の南方を走つて、急がばまはれ。といふ瀬田の橋も左側に見える。俵藤太の射殺した大百足が七卷半卷いたといふ三上山は、美しい山である。大津の停車場からは琵琶湖の遠望がわけて美しい。こゝは滋賀縣廳の在る所。間もなく

(六) これやこの行くもかへるも別れては知るも知らぬも逢坂の關

(七) 近江と山城との界。
(八) 教主護國寺。眞言宗東寺派の總本山にして桓武天皇の創建。

(一) 比叡、東、愛宕は西北、鞍馬は北。
(二) 山城國愛宕郡の山間に發し、桂川と合す。
風光明媚
(三) 大井川の下流。淀町にて宇治川に會し、淀川となる。
(四) 御所の正殿。安政元年建造。

と歌つた逢坂山のトンネルを越えれば、京都府である。長い日はやうく暮れて、東寺の五重塔が夕月の光に照される頃、京都七條の停車場に着く。此の行程は三百二十九哩。

七 京都

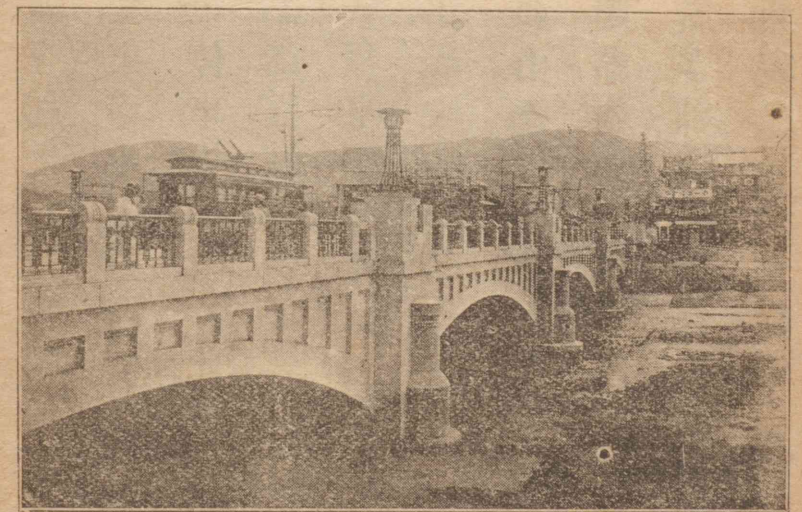
京都は比叡、愛宕、鞍馬等の山々に圍まれ、東に賀茂川、西に桂川流れて、風光明媚、畫の如き都なり。京都に入りてまづ貴く覺ゆるは、廣き御苑に紫宸殿の高殿を仰ぎ見ることなり。今の紫宸殿は六十餘年前の建

規模

造にて、中古のものならず、其の規模も至りて小さけれども、平安時代の建築さながらにて、厳しき城門も無く、石垣も無し。

碁盤
ハニシヤ
ロトシト

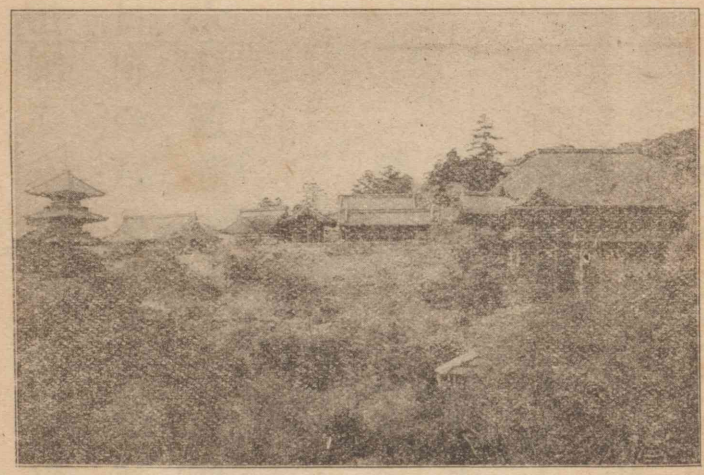
市街は縦横十文字に碁盤の目を割りたる如し。一條、二條、三條の名も何となく懐しく、室町、堀川、東洞院、烏丸、姉小路など、其の名を



(橋大條四) 川茂賀

だに

巨刹



寺水清

社巨刹あり。東寺は南に、平安神宮、南禪寺、黒谷、吉田神

聞くだに床しき心地す。

一千年來の舊都として、行く所として名所舊蹟をらざるなし。東には知恩院、八坂神社、建仁寺、高臺寺、清水寺、大佛、豊國神社、三十三間堂、泉涌寺、東福寺、西には平野神社、妙心寺、仁和寺、大覺寺、天龍寺、廣隆寺等の大

社、鹿谷、銀閣、上下賀茂社、大徳寺、金閣は北に、北野神社、相國寺、本能寺、六角堂、東西本願寺は市内に在り。此處は何の宮の跡、彼處は何の院の池など、永き日を五日六日巡遊すとも、之を見盡すこと能はざるべし。

一

一千年の昔より
 名も平安の都とて、
 眠るに似たる東山、
 さゝやく如き賀茂の川。

二

朝御苑の露ふみて、
 はるけき代々をなつかしみ、
 夕御寺の鐘の音に、
 過ぎにし人も思ひ出づ。

三

春は櫻の嵐山、
 花(一)にふく風うらめしく、
 秋のもなかの月の影、
 嵯峨野に蟲の聲高し。

(一)花ちらす風の宿りは誰か知る、我に後へよ行きて恨みん。(古今集、素性法師)もなか

四

一條、二條、三條と、
都大路はしげけれど、
かしこの社、この森、
たゞ古のしのばれて。

ハ 女帝ビクトリヤ

女帝^(一)ビクトリヤは英國現皇帝^(二)ジョージ五世の祖母
君にして、十九歳の妙齡より、八十三歳の高年に至る
まで六十五年間の久しき、英國に君臨したる明君な

Victoria (西
曆一八一九—
一九〇一)
George (西曆
一千九百十年
即位。
妙齡

前古未曾有

太陽の沒せ
ざる國土
誇稱

皇儲
^(三)Kent

慈善市

り。英國の國運は、女帝の治世間に於て、前古未曾有の
發展をなし、領土は東西新古の諸大洲に擴り、英人を
して太陽の沒せざる國土と誇稱せしむるに至れり。
母なる^(三)ケント女公は、他日大英國の皇儲たるべき
皇女の教育には、少からざる苦心を爲し、が、ビクト
リヤは幼時より正直にして、慈善の心深く、又常に質
素儉約を重んじたりき。或時の旅行に、何か欲しから
ずや。と母公の間はれし事ありしに、砂糖氣なき麵包
の一片を。と望みたりといふ。又八歳の時とか、慈善市
に臨みて、かれこれと人々への土産物を買求めつ、財

女傳

否とよ

逸話

齋す

囊全く空しくなりしが、ふと一人の甥の事を思ひ出し、一つの手箱を得んとせり。管理人はもとより皇女と知れば、直ちに之を渡さんとせしに、女傳たる某男爵夫人は之を押止めて、「否とよ。皇女は金子を持合せ給はねば、又の日にこそ。」とてとゞめしに、ビクトリヤはおとなしく首肯きぬ。さて次回小遣を與へられし時、再び行きて其の箱を求めたりといふ。これ等の逸話によりて、女帝が性質のおとなしかりしと、母公が教養のおろそかならざりしとを知るべし。後年高價なる腕環を購求せんとせし時、適老士官の寡婦の齋

點檢

首相

つゆ



帝女ヤリトクビ

せる歎願書を見て、直ちに腕環を元の箱に返して、其の金を寡婦に賜ひしが如き、幼時の美質は生涯其の光をあらはしたりき。
 女帝は非常に勤勉にして、政務を見るにつゆ厭へる色なし。首相は一日女帝に向ひて、「重要なる書類の外は、一々點檢して記名し給ふ要なかるべし。」と言ひしに、帝は、「若し朕が満足せざる書類に記名する事あらんには、そは朕にとりて重要なる事件にあらずや。」

仕事の變化

懶惰

元首

Essex Coburg. 獨逸の公國。
ゴタ公國と併
せてサクセコ
ーブルグゴタ
公國をなす。
(7) Albert.

といひて、取合ふ様子なかりき。また或時同じ首相の、
數多の書類を讀上ぐるに當りて、餘りに多數なる旨
を言上せしに、女帝は、朕にとりては仕事の變化ある
こそよけれ。朕は懶惰に日を送るを好まず。といひ、少
しも疲れたる氣色なかりきといふ。一國の元首とし
てのこれ等の語は、我等一學生にとりても、亦最も善
き教訓にあらずや。

齡二十二にして、獨逸^(四)サクセコーブルグ國のアル
バート公を皇婿に迎へ、能く妻としての道をつくし、
數多の皇子皇女を擧ぐるに及びて、又能く母として

(5) Friedrich.

(6) Wilhelm.

(8) Edward. 西曆
千九百一年即
位、同十年崩。

裔孫の繁榮

人格

の務を果したり。第一子は皇女にして、獨逸帝^(六)フリー
ドリヒ三世の皇后、即ち現皇帝^(七)ウイヘルム二世の
母、第二子は皇子にして、英國の皇位を嗣ぎたる先帝^(八)
エドワード七世なり。其の他の皇子皇女、何れも王公
の家を有ち、裔孫の繁榮いふばかりなし。

女帝の如きは、嘗に一國の君主として敬すべく、尊
ぶべき人たるのみならず、實に婦人として愛すべく、
慕ふべき人格を具へたりと謂ふべし。

自修文

九 西洋の家庭

處せらるゝ
處せまきの
意。

西洋人の客間の様を見ると、壁に掲げた油繪、机の上の花瓶、祖先から傳はつた器具や名譽の記念物はいふに及ばず、知人の寫眞や、遠方からの到來物や、皿、鉢までも處せきまで陳列してあつて、恰も小博物館の觀を呈して居る。日本の座敷床の間の飾のあつさりしたのに引換へて、賑はしく派手やかである。窓掛の總の重げに、絨毯の色の鮮なのは、日本の白い障子と青疊の小ざつぱりしたのとは、全く其の趣を異にして居る。

西洋では客間と食堂と寢室は皆別々で、食堂も相應に綺麗に裝飾してある。客を饗應する時にもこゝに導くのである。

くつろぐ
る。ゆつくりす

睦び合ふ
ふ。したしみ合

獨逸、佛蘭西などでは大抵麵包と咖啡で濟すが、英國では冷たい肉、燻した魚なども食ふ。晝食を重なる食事とする國もあり、夕食を第一の食事とする國もあるが、英國などでは夕食の卓に着く時は、同じ家内の者でも、顔を洗ひ、髪を梳り、衣服を改める。食事中は打ちくつろいで談話するが、少しも禮儀を亂すやうなことは無い。知人を招待する時も、家内一同と食事を共にする習はして、日本のやうに主人だけが客と膳に向ふのでは無い。招かれる人も其の家族一同と睦び合ふのを樂みとして來る。食後の談話時は最も樂しい時間で、其の間主婦や娘がピアノを彈ずれば、一同が歌を歌ひ、又様々の室内遊戯をする。

食卓の周旋は主婦たる人の役目で、肉を切つて盛分け

經濟
まけんやくにし
まつすること。

て、一同に分ちなどする。料理も中流の社會では大抵主婦が自ら拵へるので、しかも一片の肉を色々に使ひ、屑が出れば、其の屑で又別な料理を拵へるといふ風に、少しも物をむだに使はぬ。家の經濟を能く立て、行くことが、主婦の主要な任務であることは、東洋も西洋も古今ともに變りはない。

不斷着
つねま

日用の食品などを整へる場合にも、必ず籠を手にして市場に買ひに行くので、家に坐して魚屋、八百屋の出入を待つて居ることは無い。外出にも不斷着の儘で出掛けることが多い。すべて衣服の類も割合に質素を旨とし、身分不相應の贅澤をすることは少いやうである。音樂を聴きながら、子供の守をしながら、又は汽車、電車の中などでも、

婦人が斷えず編針を動かして毛絲を編んで居るのは、外國に遊んだ人の直ちに目につくことである。男がボタンボタンの落ちた服を着て居れば、妻がいくぢなしのやうにいはれるのは、ちやうど我が國で縦の切れた着物を子供にカウチンテ着せて置くと、母が笑はれるのと同様である。

障子の破を繕ふ世話もなし、シャツや襟などのよごれ物は洗濯屋へやるから、主婦の仕事は日本より少いやうに思はれるが、窓硝子のふき清めや、絨毯の塵拂や、部屋部の整頓、掃除など、日々の仕事にもなかく骨の折れる事が多い。併し、食事の時間に不意の來客も無く、客の來る毎に、一々茶や菓子を出すといふ習慣は無いから、其の點は樂である。

— 國定高等小學讀本 —

馬子にも衣裳

不恰好

沐猴にして冠す

一〇 行儀作法

徳富猪一郎

諺に「馬子にも衣裳」といへり。しかしいかに立派なる衣裳を着たりとて、もし其の人にして起居振舞の賤しからんには、却つて不恰好となるべし。世の中の人々、たゞ綺麗に着飾れば上品になるものと思ふは、大いなる心得違ぞかし。かゝる類を「沐猴にして冠す」とこそはいふなれ。

余はこれに就きて、行儀作法の大切なることを見る。行儀作法とは何ぞや。人々の日常の舉動の上に現

る、すべての品格なり。家庭に在る時も、朋友と交る時も、公の場所に臨む時にも、細かにいへば、箸のあげおろし、時候の挨拶、茶を飲むにも、世間話をするにも、行儀作法は包むことも、隠すことも出来ぬものなり。いかに立派なる着物を着たりとも、下品なる行儀作法を打消すことは出来ず。されば行儀作法の心得は、何人も疎にすべからず。孔子は「性相近し。習へば相遠し」と曰へり。そは人は習慣によりて、いか様にもなることをいはれたるものにして、「氏より育ち」といふ諺も同様の意味ならん。

心すべし

しかつめら
しく

筋合

口論

されば世の親たる人は、其の子供の教育に就きても、よく心すべきことなり。行儀作法とて、必ずしも丁寧に人に辭儀をするのみに限らず。また小笠原流にしかつめらしくするをよしといふにもあらず。たゞ恭敬しんかうなる心をば恭敬なる仕打に現すまでの事なり。詞遣といひ、様子といひ、何となくおとなしく上品に、自然にして作り飾りなきうちにも、自ら筋合正しき所あるがよきなり。

我が國封建時代には、いかに行儀作法の正しかりしことよ。例へば、口論をなすにすら、殊更に膝を直う

虚飾に流る

恬として耻
ぢず

し、容を正しうし、言葉靜に論じたるなり。況や長者に對する幼者の作法の如きは、上下の差別いかに嚴重なりしことよ。余は今日の社會に、かくあれと註文するにあらず。何となれば、封建時代においては、餘りに行儀作法をのみ心掛け、其の弊や、虚飾に流れたる事なきにあらざればなり。維新以來、風俗の破れたる事も多けれど、行儀作法の崩れたる程甚だしきものはなし。今や我が國民は世界各國の人と交際す。此の時にあたり、從來君子國、禮儀國などと賞讚せられたる國柄にも似合ず、不行儀、不作法にして、恬として耻ぢ

進退周旋
禮節に中る

ざるは、いかにも心苦しき次第ならずや。
されど行儀作法をもつて、唯外形の修飾のみと思ふは大なる誤なり。いかに進退周旋は禮節に中るとも、若し其の心賤しくば、自ら外に現るゝものぞかし。されば行儀作法の要は、先づ其の心を正しうするにあり。次には上品なる人を手本として、よく其の風に化せらるゝやうにするにあり。一家の主婦の如きは、其の子供の手本ともなるべき人なれば、別して行儀作法には注意すべきことなり。

一一 書物を借りに遣はす文

吹く風身にむ頭と相成り、更由度も直座なりや
先日は南遠方の更わぶ、南尋ねられ有り
がたく存上の久しうに、そいふ、面白き御話
承り近頃になく嬉しく、樂しく一日を送る事
にて、今もなほ思ひ出しては、ひとり、在り居申の
み々御序も、は、南立寄の程、お上のさそ、其の
なり、何と申す作文の良書、由承に相成り、ひ
由伺ひにつき、私も買求め、度母に申し、其にか

序

一覽致度由中司間誠に恐入りども二三日拜借
乾はるまじくもや差し由許しむされは十分
大切に致すべくも何れ此の者に由渡し下され
極致上のまづは由致までか

同返す

由手紙お見致し此の旨は系上致し
由もてなすにあつかり有難く由禮申上り久々
にて由目にかりり事とて嬉しきの餘りつ
りかと思はぬ長座致し由度相かけ申し歸宅
候に由手由申上は申せ候しなりと母に申

厄介

これの由申越の作文書差上りき由り由
下され度の末ながら由母上極に宜しく由禮由申
候へ下され度由許あらばはらか由遊に由出で
下されたく由行申上り由越しの節は一寸由はかき
いたさき度の由返すまじか

一二 河村瑞賢

徳川氏の世町人の豪富を以て聞えたるもの多か
りし中に、河村瑞賢のごときは、最も名高き一人なり。
瑞賢が一生の事業少からざりしが、其の最も力を盡

漕運
治水
纒かに

し、は、奥羽の漕運と畿内の治水となり。
初め瑞賢江戸にあり、車力を業として纒かに世を
過したりき。されど元來大志ある者なれば、久しく此
の様なる職業に安んずること能はず。或時思ひ立ち
て、上方へ赴きて身を立てんと欲し、少しの道具を賣
拂ひて金二三分を得、之を懷にして西上せり。途に小
田原にて一泊せしに、同宿の一老人、談話の序に旅行
の故を尋ねしかば、瑞賢其の志を告ぐ。老人笑ひて、日
本一の江戸を捨て、上方に行きたりとも、何のよき
事かあらん、察するに、御身は家を起すべき人なり。直

(一)相模國。

げにもと

ちに江戸に歸りて奮勵せられよ。」と諭せしかば、瑞賢
げにもと悟りて、また東へ還りぬ。

普請

かくて江戸に近づきたるに、折ふし盆過にて、瓜、茄
子の類、夥しく品川の海岸に流れ寄りたり。瑞賢ふと
思ひつき、其の邊の乞食どもを雇ひて之を取上げさ
せ、鹽漬にして普請小屋に持行きしに、大勢の日雇等、
晝食の菜にせんとて、争ひて買取りぬ。これより更に
鹽梅よく漬物に仕込みて賣出し、普請方役人の氣に
入りて、程もなく日雇頭となりぬ。

鹽梅

偶、市中に火事ありて、瑞賢の家も災に罹れり。瑞賢

(二)信濃國西筑摩郡。

少しも之に頓着せず、折から風烈しければ、火は次第に大きくなるべしと見込みて、僅かに十兩ばかりの金を携へて、夜を日に繼ぎて木曾(二)に向ひぬ。其の地に着き、或材木問屋の前に、其の家の子供の遊び居るを見て、小判二三枚取出し、小刀にて穴を穿ち、こよりを通して、手遊にとて與へぬ。さて主人に會ひて、急用あれば、材木多く求めたし。といふに、主人は先程のふるまひを見て、いかさま大家の人なるべしと深く信じられたれば、即座に賣買の約束をなし、瑞賢はすべて其の材木に己の極印を捺したり。かゝる所に、江戸大火に

いかさま

極印を捺す

騰貴

て材木乏しく、其の價俄に騰貴せしかば、材木商追々木曾に馳來りて、之を求めんとす。されどあらゆる材木は既に極印を捺したるに、いづれも是非なく瑞賢に頼みて、其の分配を請へば、瑞賢はこれを高價に賣り、立ちどころに、數千金を得て江戸に歸りぬ。これより家宅も廣くし、手代、召使も多く雇ひ入れて、處々の普請を請負ひぬ。

或時増上寺の本堂の棟瓦壞れ落ちたり。其の修繕を入札にて請負はするに、破損は僅かのことながら、足場を造るに大いなる費用を要すべしとて、人々の

修繕
入札

須臾

申し出づる價、殊の外高し。然るに瑞賢だけは、其の價他の三分一にも及ばざりければ、札は其の手に落ちぬ。皆々、さすがの瑞賢も此の度は損耗すべし。さるにても如何なる手段を試みんとするにや。と噂したり。瑞賢は本堂の前にて大いなる紙鳶を揚げ、棟を越えたる時、之を狂はせければ、紙鳶は彼方に落ちて、絲は棟を跨げり。其の絲の一端に繩梯子を繋ぎ、他の一端より繰引にして、よき程を計りて、地上に立てたる杭に結び附くれば、直ちに梯子は出來上りぬ。乃ち少しの人夫をして、瓦を携へて棟に登らしめ、須臾のうち

機に臨み變に應ず

に修繕を終へたりといふ。

瑞賢は才智湧くが如く、機に臨み變に應じて、自在に事を行ひしかば、久しからずして鉅萬の富を重ねるに至れり。晩年に及びて士に列せられ、元祿十二年歿しぬ。年八十二。

一三 初雪

坪内雄藏

朝の風ひとしほ冷たく、空には雲の往來あわたしく、霰も降來べき氣色なり。空は一面に曇る。風いよいよ冷たし。

小止なく

堅き霰に交りて、鹽のやうなる雪はらく、と樹の枝を打つ。暫くはさら／＼と音立て、小止なく降る。細かき霰、瓦屋根を打ち、飛石の上を跳ねて、庭中に散布く。

杵の頭
垣の結目

此の音暫くにして止み、續いて鳥の羽根のやうなる雪、ひらく／＼と舞落つ。此の雪次第に降重り、燈籠の屋根、杵の頭、垣の結目など、綿を着けたるやうになる。地も一面に白く、樹々の枝みな満開の花を着く。緑の松は重げに枝を垂れ、南天燭の實はいよく赤し。

犬の足跡より消初む

やゝ小降となる。
窓さきに雀の聲聞え、笹の雪をり／＼滑る。
雪全く止む。空の雲次第に霽れて、薄日の光漏れ、野も山も目覺むるやうに鮮なり。
鳥の聲高き空に聞ゆ。
空全く霽る。日影ひとしほまばゆし。
松の枝は自ら跳上り、軒の雫こゝかしこより垂る。庭の雪は犬の足跡より消初めて、野も山もやがてもとの姿となる。
風なほ寒し。

— 國語讀本 —

自修文

一四 盾の両面

昔西洋の或國にて、凱旋のしるしにとて、盾を樹の枝に懸置きけるに、彼方より一人の騎馬武者來りて、あゝ見事なる金の盾よ」といへり。然るに、又此方よりも同じく武者一騎來りて、あゝ見事なる銀の盾よ」といふ。彼方は金なりといひ、此方は銀なりといひて互に譲らず。はては劔を抜合ひて切結ぶに至りぬ。此の時一人の僧通り掛りて、二人の中間に入り、さて何故の争ぞ」と問ふに、我は金の盾なりといふに、彼は銀の盾なりといふより事起れり」といへば、彼の僧大いに笑ひて、それは各、其の半面を見て、他の一面を知らざるが故なり。見られよ、一面は金にして、一面は銀な

切結ぶ
まきり合つて刀
をあはせる。

我に返る
正氣になる。
輕忽
かるくしむ
こと。そこつ

るを」といふに、二人の武士は始めて我に返りて、其の輕忽なるふるまひを耻ぢたりといふ。

一五 紀州蜜柑

世は冬枯の寂しきに、此のわたりの郷々は、山々谷谷黄金色の果實枝もたわゝに實のりて、朝まだきより蜜柑採る歌勇ましく聞ゆ。高き所より眺むれば、川尻に動く、白帆の影、それやがて蜜柑船にして、箱詰にしたるを、北湊に積下すなりけり。北湊は有田川の河口にあり。數百萬箱の紀州蜜柑皆一たびは此處に集

枝もたわゝ
朝まだき

(一)紀伊國有田
郡。

防波堤

歸航

傳馬船

口錢

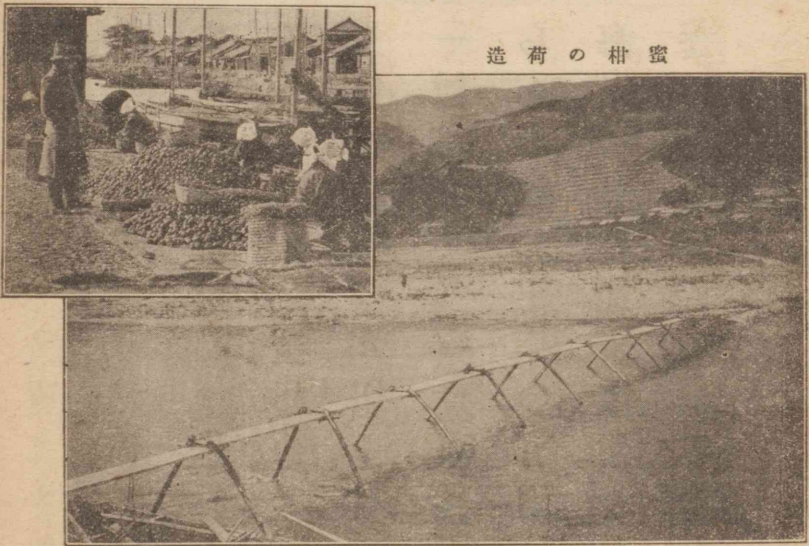
るなり。半町に五町程の防波堤は、二間程の高さに積まれたる蜜柑箱もて埋められ、輸送専用の汽船二艘かはるがはる出帆す。狼の吼ゆるが如き汽笛、浦風に響きて、今しも歸航せる汽船沖に懸れば、親船に運ぶ傳馬船幾十艘、覆らんばかりに蜜柑箱を満載して一時に漕出づる賑、北湊の住民一箇年の生活費は、たゞ此の數箇月に得らるとぞいふなる。

送先は東京、名古屋、大阪、京都の四大都府。其處には數十軒の蜜柑問屋あり、荷主より若干の口錢を取りて、仲買に賣捌く。荷主中よりは一名の總代上り來て、

賣揚代金

徴収

蜜柑の荷造



蜜柑出荷の光景 (有田川)

問屋の販賣を監督し賣揚代金を徴収し、一纏として之を北湊なる蜜柑方事務所に送り事務所にては、それ〴〵之を荷主に配達する仕組なり。蜜柑に温州、大平、小蜜柑の三種あり。温州は品質最も優良にして價貴く、多くは東京に送る。大

平之に亞ぎて、品質まされり。小蜜柑は名の如く形小
 さけれど、味至りて甘し。蜜柑は何時の頃より植始め
 たるか、確かならず。恐らくは徳川時代に入りての後
 なるべし。紀州蜜柑の一種に八代といふものあるよ
 り見れば、初は九州よりや傳はりけん。又温州といふ
 一種あるより察すれば、支那(一)の南方よりも來りしな
 らん。されど紀州の有田は地味氣候の適したるにや、
 海岸數里の地、皆蜜柑ならざるなく、今や數百年來培
 養の効を経て、かゝる美果の產地とはなりしなり。
 櫻の花も、桃の花も、梨も、山吹も散りて、世は五月雨

(一)支那浙江省に
 温州といふ地
 あり。

彈丸大

の鬱陶しきころとなれば、有田の里は蜜柑の白き花
 山谷に満ちて、朝風に薰る高き香は、海を越えて淡路
 島へも通ふといふ。花散りて七八月ともなれば、彈丸
 大の碧玉、累々として枝頭にあり。霜を戴くに及びて
 紅玉となり、十一月に至りて全く熟す。熟するを見て、
 色の最も赤きものより採る。採りたるは上中下凡そ
 三等に分ちて箱に詰む。其の頃は男女老幼一家總掛
 りの忙しさ。朝まだきより夜半過迄、目眩しきまでの
 活動なり。箱詰にし終れば、蓋に、エブを書く。エブとは
 商標のことにて、かの酒に正宗、劍菱、澤の鶴などの名

商標

あるが如く、これにも安諦錦、玉椿、大極上、都の花など、思ひ思ひの名を附くめり。

一六 歳末の十日

二十二日 水曜日 日本晴、風なし。蠅四五匹、切干を干したる筵の上に飛ぶ。漬物の手傳す。

煤掃
すがくし

二十三日 木曜日 手水鉢に薄氷張る。晝の暖さは昨日の如し。早朝より煤掃を始め、四時過終る。湯に入りて心地すがくし。

二十四日 金曜日 空少しく曇りて、木枯身にしむ。

犬の遠吠

髪を洗ひ、障子の張替す。山田の叔母上より葉書あり、病氣全快、年明けて早々年禮に來らるゝ由報ぜらる。嬉し。夜更けて犬の遠吠頻りに聞ゆ。

涎掛

(一)朝鮮の港。京城の西南約十里

二十五日 土曜日 霜柱立つ。午後より曇りて、雪ちらつく。毛絲の涎掛を編上げて、岡山の雪子へ送る。仁川(一)の姉上、青森の兄上へも、歳暮の小包出す。垣根の檜の木に名も知らぬ小鳥來る。

足袋

二十六日 日曜日 風寒し。強がりの三郎も足袋をはく。庭の山茶花散始む。三郎の綿入の縫ひかけと、とし子の帯とを縫上ぐれば、夜は九時過になりぬ。

風止みて月冴えたり。明日も大霜なるべし。

二十七日 月曜日 霜白し。風なく暖なり。午前中洗

張し、午後糰もちを水に浸す。三郎相撲すまを取りて、綿入の

袖を綻はばして歸る。町役場に會議あり、父上の歸り

遅し。

勘定

二十八日 火曜日 雨降り霏みぞれ交る。勘定取前後して

來り、新しき通帳を置きて歸る。柱曆、數の子、串柿、蜜

柑などの歳暮を貰ふ。

二十九日 水曜日 氷厚し。棕櫚しょうりの葉に風の音騒ぐ。

収入役の木村様、襟卷に顔を埋め、寒げなるさまし

頭巾

て入來られ、繩なは暖ぬる簾れん鼻で分けたる頭巾かぶといひ

て、一同を笑はせらる。父上より下駄、足袋、手拭など

戴きて、皆々喜ぶ。兄上賣物の山林を見に行き、大き

なる門松を持ちて歸らる。山を買ふ約束整ひ、今夜

手附金を渡し、年明けて登記すべしとのこと。早く

夕飯を濟し、餅搗す。隣の榮吉様夫婦手傳に來られ、

賑し。宵寝の三郎も、遅くまで嬉しがりて餅を運ぶ。

十二時搗終る。

三十日 木曜日 昨日に引きかへて、氷なく、霜なく、

風なし。柿の木の根もとに、落おち臺たいかすかに見え、水仙

手附金
登記

調理

の花二輪咲く。兄上門松を立て、神棚を飾らる。仁川の姉上より小包來る。見事なる雁なり。調理して隣へも分つ。いづれも珍しがらる。夕方獵銃を擔へる人數多の獲物を携へて門前を過ぐ。

三十一日 金曜日 時々吹雪す。ごまめ、數の子、煮豆

などの重の内、雜煮の用意も済む。兄上と二人して年賀狀を認む。湯に入りて父上手製の晦日蕎麥を戴く。一年中の事を思ひかへすに、やましき事なくて嬉し。

— 國定高等小學讀本 —

重の内
雜煮
蕎麥

一七 歲 暮

小出 榮

此の年、此の日、惜しむべし。

落葉は枝にかへり來ず。

流は淵にとどまらず。

此の月、此の日、惜しむべし。

此の月、此の日、惜しむべし。

昨日の我は我ながら、

明くる日、今日の日にあらず。

此の年、此の日、惜しむべし。

一八 日章旗

松波仁一郎

日章旗は我が大日本帝國の國旗でございます。諸外國の國旗に、それ〴〵大切な意味が含まれて居ります。やうに、日本の國旗にも、勿論意味のあることとてございませぬ。私は、今我が日章旗を、色の上からと、地理の上からと、祭祀といふ事の上からと、國體の上からとに分けて、説明しようと思ひます。

先づ色の上から申せば、全體、色には別段意味があるのではありますまいが、其の色を見る人には、種々な感情を起させて、それが、色の意味の如く思はれるものでございませぬ。さうして、其の感情は人々によつて、多少の相違はございませうけれども、大體に於ては一致して居ります。

不鮮明

清淨潔白

黒色は不鮮明で暗黒を意味し、不愉快の感じを人にあたへます。青色は強過ぎて凄い。黄色はなんだかいやでございませぬ。白色は至つて汚のない、清淨潔白の意味をあらはして居ります。西洋では、これに靜とか平和とかいふ意味を持たせて居ります。たゞ困つたのは、軍のときの降參旗が此の色であることとてご

丹心

赤誠

ございますが、これは、二心の無いことをあらはすもの
 らしいのでございます。赤色は日本も、支那も、西洋も、
 みな同一の意味を持たせて、誠實をあらはします。丹
 心、赤誠などの熟語もあります。西洋では、また熱心の
 意味を持たせて居ります。熱心の極は烈しくなりま
 す。其の結果はあぶない。そこで、鐵道の警戒標など
 も、赤色が危険のしるしに用ひられて居ります。日章
 旗の赤い日の丸は、熱心と誠實との塊でありますか
 ら、一朝破裂したときは危険でございますが、しかし、
 平和の白色でこれを包んで居りますから、心配はご

國際上の同
盟

ざいません。それも外國人のしむけによつては、何時
 破裂して彼等をおどろかすかも知れません。これ全
 く日本の武士的氣象をあらはして居るのでござい
 ませう。

地理上から申しても、日本は東に位して居る、日の
 出づる國でございませう。さうして、已に西の方の國と、
 國際上の同盟も致しましたから、あたかも太陽が東
 より出でて、次第に其の光を西に及す如く、これより
 は、東の勢力を益、西に及さねばなりません。日の御旗
 は實に日本國の好徽章でございませう。

語弊

欽仰

金甌無缺

次には、祭祀上のこととでございませうが、いづれの國の國旗も、みな祭祀の意味を含んで居ります。祭祀といふに語弊がございませうなら、敬神と申しても宜しうございます。皇祖天照大神は、また日神と申します。其の日神の御影に象どられましたのは、神明の加護の下にあるやうな心地がして、國民の欽仰の念を強からしめませうものと思ひます。

國體の上から申しますれば、我が日本は萬世一系の天皇を戴きまして、其の金甌無缺、天壤無窮なること、恰も太陽の始なく、終なく、又一の虧缺なく、圓滿に

して赫々たる如きものでございませうから、これに優りまする好徽章は、他に決してありませんまいと信じます。

以上は私一箇の解釋でございませうが、要するに、日本の國旗は、いかなる點から觀ましても、申分のない徽章であると思ひます。どうか此の國旗の精神を全國に普及して、國民の愛國心を鼓吹し、日章旗の名譽を海外にまで輝かせたいと存じます。

—講演筆記による—

普及
鼓吹

一九 國歌

日本の國歌は君が代である。三十一文字の短歌、これ程短い國歌はこの國にも無い。形の短いばかりで無く、「君が代の長久」といふ御祝詞を述べただけで、其の内容も誠に單純である。併し此の單簡、此の單純が、諸外國とは全く異なつて居る。我が國體と國民性を、十分に説明してゐるのである。

日本國の皇室は開闢以來の皇室である。此の日本の國土は我が皇室の君臨します所と、神代の昔か

内容

開闢以來

君臨

德望

ら定まつてあつて、皇室と國土とは決して離れないのである。外國の皇室にはさういふ例は一つも無い。もと普通の人民の中から、或は德望により、或は權力により次第に成上つて、王となり帝となつたのであるから、皆歴史よりはずつと新しい皇室である。國土は其のまゝで、皇室は幾度も變つたのである。それ故人民の考にも、國土と皇室とを一つにして考へる事は出來ない。皇室即ち國家とは考へないのである。かういふ譯ゆゑ、外國の國歌では、どうしても國土や國家の事を歌はなければ満足が出來ない。皇室の

御繁榮を歌つただけでは物足りないのである。日本では皇室の御繁榮は即ち國家の繁榮であるから、皇室の御繁榮を歌ふだけで十分である。短い君が代の歌は、皇室の御繁榮を歌ふと同時に、國家の繁榮は勿論含まれてゐるのである。

君が代の歌にあらはれた思想、天皇の御代の長久を祈るといふことは、日本の上代から種々の文學にも現れて居り、祭禮や風俗にも交つて居ること、事新しくいふまでもない。皇室の方でも人民を御いづくしみになつて、皇室と人民との間に争の起つたと

事新しくいふまでもない

信念

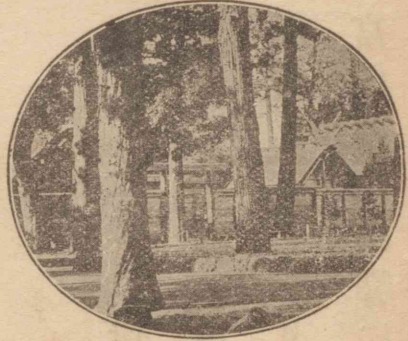
いふ事は昔から絶えて無い。皇室の御繁榮は即ち人民の繁榮幸福であるといふことが、日本人の信念である。それ故別段に人民の自由や幸福を歌ふ必要はない。短い君が代の歌には、國家の繁榮と共に、人民の繁榮幸福も自ら含まれて歌はれて居るのである。

二〇 伊勢神宮

伊勢神宮には内外の二宮があつて、内宮をば皇大神宮と申し奉り、外宮をば豊受大神宮と申し奉る。參宮線の山田驛に下車すれば、外宮の神域まで僅かに

神域

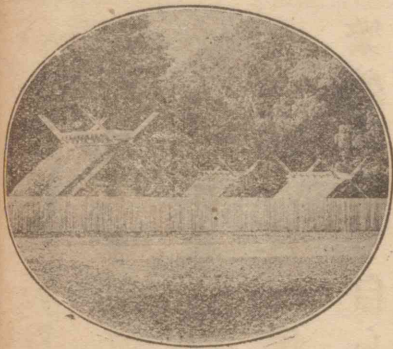
丹青の飾



宮 内

數町である。神殿の造りざま、御屋根は萱葺で、檜木の白木、丹青の飾の無い所に神代の質素な様も思はれて、此の上も無く尊い。

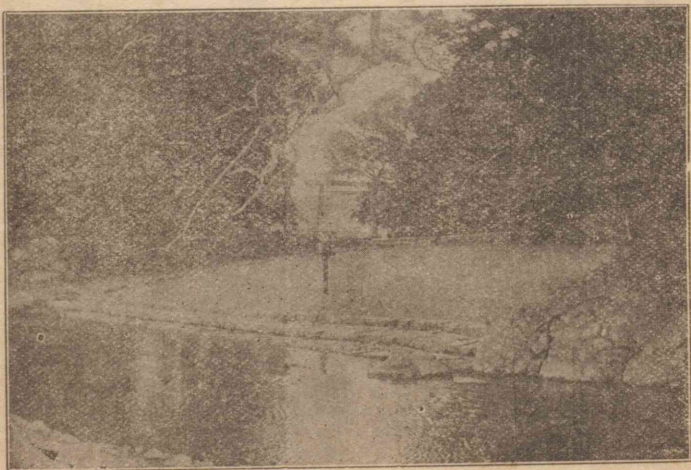
神苑



宮 外

外宮に参拜して内宮に参る。間の山を越えて五十町の道のりである。五十鈴川に架けた宇治橋を渡つて神苑にはいる。廣い芝生に若松の緑新しく、掃ひ清められた道には塵一つも無い。何といふ心

持のよいことであらう。いよく進めば生ひ茂つた古い杉古い檜、人間の世を離れたやうに思はれて、神威の尊さがしみぐと身にしむ。一の御鳥居をくゞつて左へ曲り、二の御鳥居を通つて御垣の下に跪く。飾らぬ彫らぬ白木造の御宮、神々しいといふより外



川 鈴 十 五

瞑想

油然

齋宮

は無い。むかし芭蕉がこゝに詣でて、
 何の木の花とも知らず匂かな
 と歌つたのも思ひ出されて、しばし瞑想をこらす中、
 我が國體の尊さを思ふ心が、油然と湧出るのである。
 神宮は古來皇室の御尊奉最も厚く、久しい間皇女
 が齋宮としてお仕へ遊ばされる例で、數百年間續い
 たが後醍醐天皇の御代から其の事は絶えた。今は祭
 主には皇族が任ぜられるので、久邇宮多嘉王殿下が
 今の祭主宮であらせられる。

二一 類似せる東西の諺

珠玉

惡錢身に着かず。	盜賊は富まず。
大慾は無慾。	大慾袋を破る。
猫に小判。	豚に珠玉を投ずる勿れ。
朝起は三文の得。	朝起の鳥は餌を拾ふ。
急がば廻れ。	愈急がば愈遅かれ。
柳に雪折なし。	蘆は立ちて櫂は倒る。
苦しき時の神頼。	病室は信心の寺なり。
人のふり見て我がふ	他人の過は教師なり。
り直せ。	

悪は染み易し。

悪しき教は覺え易し。

月満つれば虧く。

満潮あれば干潮あり。

女子は口多し。

女子の髪は長し、其の舌

は更に長し。

船頭多ければ船山に

料理人多ければ羹あつちを損

のぼる。

ず。

外面如菩薩ハツサツ、内心如夜

美しき貌かほにも悪口を藏

又。

す。

二二 百人一首物語

こゝを先途
血眼
笑ひさゝめ
ふさはし
散りぼふ

餘りの賑しさに、一度寝入りし祖父も出て來られて、おのれも仲間入りせんと、大いなる黒縁の眼鏡かけて、むべ山風と讀上げらるれば、興味もひとしほ加りて、こゝを先途とカルタ拾ひ上げんと競ふ人々、皆血眼なり。兄弟姉妹はいふも更なり、父も母も、従兄弟姉妹も、隣の人も、下女下男まで打雜りて、笑ひさゝめく賑しさは、新年の遊にはいとふさはし。

面白きは、人々の前に散りぼひたるカルタの畫にも、種々の歌人の集れることなり。天皇あり、皇子あり、大臣あり、學者あり、僧侶あり。更に注意してよくく

叔姪

(一)和泉守橋道貞の妻。後一條天皇の中宮上東門院に仕ふ。
(二)同じく上東門院に仕へ、早世す。
一人一かどの歌人
秀歌

觀れば、其の歌人中にも親子、兄弟、叔姪等の關係のあ
るも尠からずかし。あらざらん此の世の外の」とよめ
る和泉式部の娘に、小式部内侍あり。和泉式部の子な
れば、小式部とは呼ばれたるなり。母の子とて一かど
の歌人なりしが、年に似合はぬ秀歌の多ければ、「こは
必ず母の代作なるべし」と時の人も思ひたりけん、或
年和泉式部が夫と共に丹後の國に下りけるに、小式
部内侍一人、京都に留り居ける折しも、禁中に歌合の
會あり、權中納言定賴、小式部に向ひて、「詠進の期も迫
り侍り。出し給へる丹後への御使は歸り來りしか」と

(三)藤原氏。寛徳二年(一七〇五)薨。
(四)藤原賴忠の子。四條大納言と稱す。長久三年(七〇二)薨。年七十六。
(五)兵部卿。

戯るれば、小式部内侍ほゝゑみて、定賴卿の袖をひか

へ、

大江山いく野の道の遠ければ

まだふみも見ず天の橋立

と詠みかけたり。定賴卿驚きて、返歌にも及ばず、「こは
あさまし」と袖引放ちて逃歸りぬとぞ。「名こそ流れて」
と詠める大納言公任卿を父とし、「朝ぼらけ宇治の川
霧」の歌詠みし人にも似合はぬ拙さよ。

陽成天皇の皇子に元良親王おほし、僧正遍昭の子
に素性法師あり。中納言行平と在原業平朝臣とは兄

(四)藤原賴忠の子。四條大納言と稱す。長久三年(七〇二)薨。年七十六。
(五)兵部卿。
あさまし
(六)俗稱良峯宗貞。雲林院に住す。寛平二年(七五〇)薨。年七十五。
(七)俗名良峯玄利。雲林院、良因院に侍す。
(八)阿保親王の第二子。寛平五年(一五三三)薨。年七十六。
(九)阿保親王の第五子。右近衛中將。元慶四年(一四〇〇)卒。

(一) 望行の子。土佐守玄蕃頭。天慶九年(一〇六〇)卒。
 (二) 有女の子。延喜年間大内記となる。
 (三) 房則の子。延長年間内蔵大允に進む。
 (四) 春光の子。肥後守。正暦元年(一六五)卒。年八十五。
 (五) 清原元輔の女。一。條天皇の皇后。定子に仕ふ。
 (六) 藤原爲時の子。藤原宣孝の妻。後。上東門院に仕ふ。
 (七) 本名藤原賢子。高階成章の妻。後。一條天皇の乳母。
 (八) 藤原俊忠の子。五條二位と稱す。元久元年(一八九)葬。年九十。
 (九) 俊俊海の子。建仁二年(一一二二)葬。年八十六。

弟にして、貫之と友則とは從兄弟同志なり。清原深養父の孫は清原元輔、元輔の子は清少納言なり。源氏物語書ける紫式部の娘に大貳三位あり。物語の作者として知らる。思ひ入る。山の奥の歌詠みし皇太后宮大夫俊成こそ名だたる歌人にして、其の子の權中納言定家は即ち此の百人一首の撰者なり。槇の葉に霧立昇る」と詠める寂蓮法師も、此の人の從弟なりけり。中にも恐多きは、後鳥羽院と御子の順徳院とにてまします。世を思ふ故に物思ふ身は」と仰せられ、なほ餘りある昔なりけり」と遊ばされたる、そのかみを思

わななく
 (一) 京極中納言と稱す。仁治二年(一一九〇)葬。年八十。
 (二) 九僧俊海の子。建仁二年(一一二二)葬。年八十六。

ひ出でては、拾ひ取るカルタの手も、自らわななく心地ぞする。

二三 雪國の冬 其の一 五十嵐 力

同じく我が國土のうちながら、琉球、臺灣に住む人は、雪といふものを知らぬ。まして雪國の冬の有様などは、彼等には嘘としか思はれまい。

寒國では霜が降出すと、もうそろそろ冬籠のしたくにと取掛る。庭木や、果樹は丈夫な柱を支として、小枝をば繩で吊して、雪折を防ぎ、小さい木は板や、蓆で圍

目張

つて、凍らぬやうにする。家の外側は、鴨居から二尺程あけて、其の下は悉く板で圍ふ。障子の合せ目は紙で貼りつけて、吹雪を防ぐ用意をする。雪圍と目張とがすめば、まづ冬籠のしたくが整つたと言つてよい。

遠山の頂に見えた白雪が、次第に麓の方に進んで來て、里に降初めるのは十一月の初。それから積つては消え、消えては積る中に、冬至頃になると、地上の雪がしつかり固まつて消えなくなる。之を寢雪といつて、これから翌春の三月頃までは、地面を見ることがない。雪國の冬の生活は寢雪から始る。

冬至

雪もよひ

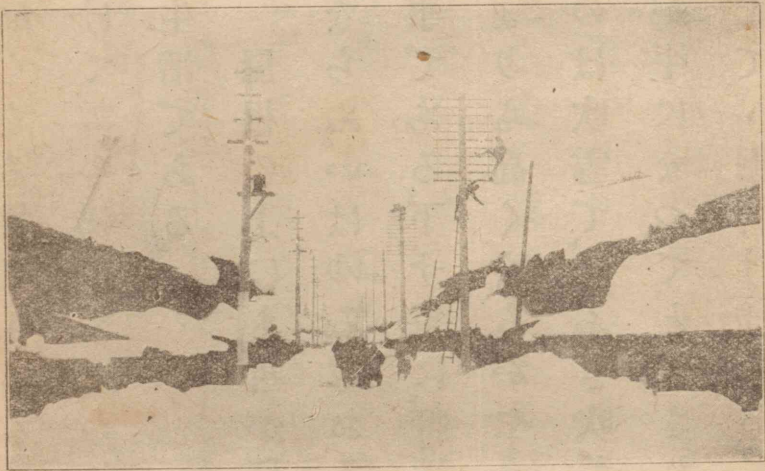
沈々

氷柱

寢雪となれば、後はたゞつもるばかり。寒い盛には、一日に五六尺も積ることがある。雪もよひのひどく寒い晩は、よく爐に焚火して更けるまで語りあふ。外は沈々として何の音もない。空は眞暗で一物も見えぬ。話のすゝむにつれて、おしつけるやうに寒くなる。かういふ夜が最も多く積る時で、あくる朝目をさますと、耳が切れるやうに寒い。息が凍つて、夜着の襟が白くなつて居る。起出て臺所に行くと、屋根裏の煤や蜘蛛の巣が、銀モールの様に眞白に凍つて居る。鬚にも氷柱つらなが下る。銅盥かたらいを取れば、手について離れぬ。鍋を

取れば、鉉つづが指に凍りつき、煙草を吸へば、煙管の吸口が唇に凍りつく。無理にはがせば、皮がむけてしまふ。窓を開けば、雪が腰を没するばかり。えらい寒さだ。寒暖計はと見れば、水銀が華氏の最底部に縮み込んで、ぼつちりも上つて居らぬ。

積つた雪は踏固め、或は拂ひのける。雪を踏むには、深沓といふものがある。藁製で、膝にかゝる程の深さである。一尺前後の雪には、これで間に合ふが、二尺餘にもなれば、カンジキをかけねばならぬ。なほ深く積れば、其の上に米俵をはき、下がためして、其の上を再



越後高田の雪景

び固め直す。道が高くなつてからは、雪掻で道の両側に掻上げる。掻上げるに随ひ、次第に高くなつて、遂に高い銀の堤が出来上る。其の堤の高さが、時として二間以上になることもある。道幅の狭い、雪の拂へぬ處では、いつまでも踏固めるので、道路が家の軒よりも

高くなる。往來へ出るには、戸口から穴を掘り、段をつけて、雪の梯子を上らねばならぬ。まるで一種の穴居生活である。

屋根の上にも雪が積る。三四尺になると、下さねばならぬ。いはゆる雪おろして、一冬に三四回は普通の事である。下す毎に、軒端の雪が益、高くなり、時には軒よりも高くなる。かやうな場合に、最も人を困らせるのは吹雪で、一ふき吹荒めば、屋根の雪と地面の雪とが平になつて、とぎされてしまふ。家の内は闇になる。慌て、掘開けば、やがてまた閉される。全く人と雪と

吹荒む

の戦で、雪のやり場の無い處では、雪塊を樞に積んで、遠方の川に棄てねばならぬ。

雪中生活で最も怖ろしいのは、ザイといつて、雪の上を走る洪水である。幅の狭い河流は、嚴冬の眞夜中になると、やゝもすれば氷結する。氷結した上に、上流の水が流れて来てすぐ凍る。兩岸の雪が其の上に落ちてまた凍る。かくして上流の水は堰れくゝて、遂には積雪の上を走つて、高窓から瀧の如く室内に注ぐ。寐耳に水の大騒。町中總出て、川筋の水を切開くあわたいしさは、言葉にも筆にも盡されぬ。

二四 雪國の冬其の二 五十嵐 力

美しいのは氷柱である。方言に金氷かみこともいふ。細き、太き、短き、長き無数の氷柱が軒から下つた状は、研澄した劔を倒に吊したやう、又筍が倒に生えたやうで、日光を受けて照輝く時は、水晶の簾かとも疑はれる。長さの四尺五尺、徑の二寸三寸のものは不斷に見る所で、大廈高樓から垂れさがる氷柱には、徑二三尺、地面から生抜いた大きな柱のやうに見えるのも少くない。子供の遊には、雪達磨、雪女房、御堂づくり、坂づく

大廈高樓

とりぐ

物の見事に

り、隧道づくり、雪合戦など、皆とりぐに興味はあるが、わけて楽しげなのは雪滑である。寝雪になると、車馬が廢つて、橇の世の中になる。橇は雪中唯一の運搬器である。晴天が續いて、橇が頻りに通ると、道路の雪が、磨りみがかれて鏡のやうになる。あぶないこと甚だしい。油斷すればすぐに轉ぶ。それ故下駄の裏には釘を打ち、藁靴には鐵カンジキをつけて歩くが、待ちかねるのは子供で、彼等はそれを遅しと竹ボホラといふ滑下駄すべくだをはいて、勢よく滑り出す。巧な子供は、先よけ、先よけと呼ははりながら、物の見事に、一二町は

心ゆく

一息に滑りゆく。馴れぬ者の側目には、冷汗するほどあぶなく見えるが、馴れた者には、これほど心ゆく遊はない。

寒が明いて春雨が降出すと、積つた雪の嵩が減つて、どつしりと締つて来る。此の締つた雪の、夜半に凍つたのを堅雪といつて、これがまた暖國人には思ひも寄らぬものである。今迄は綿の如く柔で、脛を没し腰を没した雪が、堅雪になると、靴でも下駄でもぬからなくなる。田畑も、野山も、石のやうに堅くなる。かうなると、學校に通ふ子供は、田でも、畑でも、見通しに、一

目星をつける

潑刺

直線の近路を行く。勇んで川狩や、兎狩に出かける。魚の捕方が又面白い。小川ならば、魚の居さうな所へ行つて、上流を堰止める。次に目ざした場所へ、雪塊を山の如く投込むと、水は忽ちに干てしまふ。其のあとで、泥を搔分けて、鯉、鮒、泥鰌、逃す氣遣なく、思ふまゝに生捕られる。池、堀、湖水などは、厚氷を渡つて、目星をつけた所に行き、鍬や鋸で氷を割つて、一二尺の口をあけ、板で頻りに水をかい出せば、太魚、小魚潑刺として氷の上に跳りあがる。

かゝる雪國の奇觀は、暖國人のとても想像の出來

ぬ事であらう。

自修文

二五 雪物語

一 常磐御前

(一)二條天皇平治元年、藤原信賴、源義朝の起せし亂一敗地に塗る
 大敗してどうするとも出さない
 (二)長田忠致、義朝の家臣
 返忠 敵に内通すること
 (三)平氏、邸のあった處、今の京都市下京區
 (四)美濃國
 雜仕 雜務をつとめる者

平治の亂に義朝一敗地に塗れ、東國さして落延びようとしたが、長田が返忠に、尾張の國で討れた。前の右兵衛の佐頼朝も、彌平兵衛宗清の手に生捕られ、二男中宮進朝長も首になつて六波羅に着いた。夜又御前とて十一歳の女子、わらはも義朝の子なり。とて、一人宿を立出でて、杭瀬川に身を投げて死んだ。此の外に、九條院の雜仕常磐の腹に三人の男子ある筈との嚴しい詮索。常磐聞いて、身一つに

歎く
ふいのりねが

たそがれ時
ゆふがた

しほに
よい機会に

祈請
いのり

(五)義朝のこと
 綺羅を飾る
 うつくしく着かざる。綺はあや、羅はらすもの

よしみ
したしみ

てさへ忍び難きに、三人の子供を引具しては、誰かはしほしも宿かすべき。まづ年頃頼み奉りたる観音にこそ歎き申さぬ。とて、八つになる今若を前に立て、六つの乙若の手を引き、牛若は二つなれば懐に入れて、たそがれ時、人に顔見られぬをしほに、足に任せて宿所を出た。佛前に參つても、二人の子供を脇にすゑて、泣くく終夜の祈請を遂げた。日頃は左馬頭が最愛の妻女とて、供人まで綺羅を飾つたが、今はそれに引替へて、身もやつれ、歎きに泣きしをれた姿、目も當てられず、師の僧もあはれに思つて、しばしは忍びておはしませ。と慰めたが、常磐、こゝは六波羅近ければ、しばしとても安心なり難し。日頃のよしみまことに忘れ給はずば、観音によく祈りて給ひ候へ。とて、これよりは

心あてに
心だのみに。

(六)永暦元年。

露と争ふ涙
露の如くしげ
くおちる涙。

苦節

こんなんの中
にあつて變ら
ぬ心がけ。
(七)讚岐國木田
郡。
(八)長門國豊浦
郡。

(九)小野務の詠。

大和の國宇陀郡を心あてに迷ひ出た。

二月十日の事なれば、空吹く風も尙寒く、路行く足は雪にやぶれ、露と争ふ涙には、袂も袖もしぼるばかり。一人を懷に、二人の子の手を引き、腰をおさへて行惱む有様見知らぬ人々もあはれを催さぬ者は無かつた。嗚呼此の苦節。此の懷の一子こそ、後には源氏の武將として、平氏を屋島、壇の浦に殲にして、父祖の仇を報いた源九郎義經である。

雪深き山ふところのちご櫻

花咲かんとは思ひかけきや

二 靜御前

幼時母の懷に抱かれた時と同様の吉野山の雪踏。義經

末路

一生のをはり

ぎほ

(一)僧徒。

講堂

寺で講義や説

教をする堂。

詮議

さうだん。

(二)佐藤元治の

子。三郎と稱

す。

(三)平教盛の子。

勇力あり。

(四)四郎と稱す。

屠所に歩む

羊

ころされる場

所へひかれて

行く羊。



前 御 靜

の末路は實に哀であつた。吉野山の大眾は頼朝方の咎を恐れ、講堂に打寄つて討取る詮議最中。奥州から従つて來た二人の兄弟、兄嗣信は屋島の戰に能登守教經の矢に斃れて、其の弟の忠信、雪の上に跪いて言ふには、我等が今の身の上は、屠所に歩む羊に異ならず。君は早く落延びさせ給へ、忠信こゝに踏止つて、一方の防矢仕らん。といふ。義經、志は嬉しけれども、兄嗣信の討れし後も、其方一人あれば、尙兄弟揃へる心地したり。年の内は

(五)藤原基衡の子。陸奥鎮守府將軍。

供養

死んだ後をむらふこと。
(六)岩代國。今の福島市の邊。

(七)平塚瓢齋の臥ふところ。地名の伏見をかけた山は吉野に在り。

幾程もなし。來春は陸奥に下らんと思へば、其方も永らへて秀衡(五)にも會ひ、國に遺したる汝の妻子をも見よ」といふ。忠信承つて、「治承二年陸奥を出でし日より、君に命を奉つて名を後代に揚げよ。矢に當り死せりと聞かば、秀衡供養すべし。」と教訓を承れり。信夫(六)の里に残し、老母一人あり。これも其の時を最期と申し切つてあれば、生きて故郷に歸らんとも存ぜず」と決心した詞に、義經は日頃身に着けた太刀、鎧を與へ、自らは忠信が鎧を着て、大和路(七)さして落ちて行つた。

懷(七)にふしみの雪をみよしのの

袖ふる山におもひいづらん

靜御前は吉野までは同行したが、之もこゝにて義經に

女性
をんなといふに同じ。

白拍子の舞

昔舞妓の客にまねかれて舞せし一種の舞。
(八)源頼朝のこねばいふと。右大將な

(九)初の二句は唯くりかへしといはん爲に。賤用ひたもの。賤用の女がうんだ麻をまく玉の如くにの意。此の歌伊勢物語に初句「古物」とあり。

(一〇)壬生忠岑の歌。本の歌は山のみよしの歌にわけて、白雪ふみわけて、人の入りづれもせぬ。二銅にて造つた一種の樂器。拍子をとるに用ひる。

別れ、女性(九)の唯一人、雪ふみ分けてたどり行く。はいた靴は雪に取られ、着た笠は風に奪はれて、足から流れる血は、吉野山の白雪に點々の紅を彩つた。さて其の後鎌倉に召出されて、義經の行方を申せとの詮議。かつは白拍子(一〇)の舞を一曲奏(九)でよとの右府(八)の嚴命に立上つた舞の姿、

しづやしづしづの苧環(九)くり返し

むかしを今になすよしもがな

つゞいて、

吉野山峯の白雪ふみわけて

入りにし人の跡ぞ戀しき

と古歌を少しもぢつて義經を慕ふ貞操の志、工藤祐經(一〇)に鼓をうたせ、梶原景時に銅拍子(一〇)をうたせ、畠山重忠に笛を

(三)源頼朝のこと。右大將。藤下は將軍の尊稱。志奪ふべからず。志を失はしめることはできない。

吹かせ、關八州の勇者を眼下に見下した意氣。六十六國を掌の中に握つた右幕下も、其の志ばかりは奪ふことは出来なかつた。

二六 學校記念日

今日は我が學校の記念日なり。今より十五年以前の今月今日を以て、我が學校は生れ出でたるなり。全校の職員、生徒、卒業生、此の喜ばしき誕生日を祝はんとて、朝まだきより校庭につどひ入りぬ。來賓接待掛、餘興掛、講演掛などそれぐの分擔もことぐしく、

ことぐしく

漂ふ

人々の右に左に忙しげなる中にも、漂へるは歡喜の色なり。

家刀自

八時といふに式は始りて、校長の訓辭、市長の祝辭、知事の告辭、同窓會總代の祝文朗讀など、つぎぐあり。曾ては我等と同じやうに紫の袴着けて、日々こゝに物學びせし姉君達の、今は人の妻として、家刀自として、二人、三人の若子を連れて來場せられたるもいと多かり。これ等の人々の既往を追懷せらるゝ胸の中も樂しかるべく、我等が前途に抱く望の光も、今日は殊更に輝きまざる心地す。

既往を追懷す

前途

講堂の窓より見下せば、門内の記念樹十數本、年毎に其の數を増して、學校の歴史を語るも嬉しく、風にゆらく緑の枝は、祝賀の舞の袖かとも怪しまる。さては校門に翻る日の丸の旗よ、全校の喜を道行く人に語るに似たり。

餘興のさまぐ、今其の最中なり。楽しき今日の一日よ、あはれいつまでも暮れずにあれかし。

二七 伊能忠敬

幸田露伴

忠敬^(一)、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳

^(一)東河と號す。下總國武射郡の人。

自ら抑ふ
平々凡々

一舉手一投
足



伊能忠敬

にして家を其の子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意専心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、おのが任務を、最も圓滿に、最も麗しく果さん事を期し居たりき。

およそ、才氣あるもの常として、己が欲せざる事には、一舉手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲する事にのみ身を委ねんとするは、免れ難き習なり。たとひ己が欲せざる事なりとも、其の爲さざるべからざる事なる

情を屈し氣を抑ふ

徳量

以上は、甘んじて我が情を屈し我が氣を抑へて、我が爲すべき事をなすは、其の人當に才氣あるのみならず、また實に徳量ある人と謂ふべきなり。

奇才
資を抱く

世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少し。年少にして才のみ優れたるは、譬へば、鋭き刀の肉薄きが如し。物を截ることはよくすべし、折るゝ虞は免るべからず。されば、世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡し難し。忠敬が算數、曆術の學を嗜み、且これをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能

丹誠

氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし。といふを唯一の望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠したるが如きは、實に其の徳量の大きいなるを見るべきなり。

かくの如くにして、伊能家は興りぬ。景敬は家を繼ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、こゝに於て圓滿に果されたりと謂ふべし。

閑散

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身は、これより忠敬の自由に用ふる事を得べし。此の時は忠敬

老境に入る

爲すある人

年既に五十歳、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯まかなる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合も、我が力を試みるに足るべきなり。忠敬は、常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當りて、始めて學に就き、而して後漸く世に出てんとせり。後、爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

(二) 下總國香取郡

さる程に、忠敬は其の郷里(三)佐原を出でて江戸に來

寓

笈を負ふ

(三) 寛政九年に成稱す。寛政曆と

り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一様の笈を負ひて郷關を出て、都門に遊びて師を尋ぬる書生と異なるところは、たゞ其の若きと老いたるとの差のみ。かくて、忠敬は、身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。折から、幕府には曆法改正(三)の舉ありて、これがため特に大阪より高橋作左衛門といふものを召されたり。作左衛門は東岡と號して、算數、曆術の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、其の學の深きに服して、直ちに師弟

の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十歳なりき。普通の人情にては、己より年若き人に會ひては、たとひ己が學業など其の人に及ばずとも、なほ強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、さすがにさる事なく、喜びてそが門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢、笑柄としたりといふ。

晩學のかたきは、實にいつの世にありても、かゝる嘲笑の存するが故なり。是を以て、非凡の士にあらず

門下生

笑柄

嘲笑

墓穴に入る

蛙鳴蟬噪

蘊奥

ば、大抵自ら耻ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。元來老いて學ぶは、たまく其の志の淺からざるを顯すに足るのみ。また何の不可あらん。况や又何の耻づべき所かあらん。思ふに、區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於ては、たゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしならん。かゝれば、忠敬と同門生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明らかなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するがごとき勢を以て歩を進め、終に其の學の蘊奥を極めて、東岡門下に

肩を比すべき者なきに至れり。

かくて、忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、其の修得したる學術を、實地に運用する機に際したるは、實に五十六歳の時なりき。五十六歳といへば、人は暮齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど、忠敬は氣力旺盛にして、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂に其の志す所を完成したりしは、一に此の元氣勃々として、燃ゆるが如き

暮齡用ふるに堪へず

氣力旺盛

勇往直前

辟易

胸裏

熱心を、胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早老の人種なりといふ。是あに我に伊能忠敬あるを知らざる者にあらずや。 — 露伴叢書による —

二八 憲法發布

落合直文

明治二十二年二月十一日は、皇祖神武天皇即位紀元二千五百四十九年の大祝日なり。我が惠深き天皇陛下には、畏くも此の日を以て憲法を發布せられぬ。待ちに待ちたる三千五百萬の臣民の喜は如何にありけん。

(一)明治天皇

(三)宮城のこと。
しつらふ
(四)明治天皇と昭
憲皇太后。

有司

賢所

(四)實美、實萬の
子。明治二十
四年薨。年五
十五。

(五)清隆。明治三
十三年薨。年
六十一。

(六)神武天皇陵。
(七)孝明天皇陵。
(八)右大臣。明治
十六年薨。年
五十九。
(九)鹿兒島藩主齊
興の三男。左
大臣。明治二
十年薨。年七
十一。
(一〇)山口藩主。
明治四年薨。
(一)舊高知藩
主。容堂と號
す。明治五年
薨。年四十六。
(二)舊佐賀藩主。
閑叟と號す。
明治四年薨。
年五十八。
(三)參議兼内務
卿。明治十一
年兇徒に殺さ
る。年四十七。

此の日の式場は千代田の宮の正殿にして、いと麗
しうしつらはせ給へり。中央に兩陛下の玉座を設け、
其の左右に各宮殿下、各華族、百官有司、各國公使等の
座を設けたり。朝の間雪少し降りしが、やがて麗に霽
れわたれり。

午前九時、天皇陛下には先づ賢所を拜ませられ、憲
法發布のむねを申しのべさせ給ひ、午前十時、兩陛下
には侍従に神器を捧げまつらしめて、君が代の奏樂
のうち、正殿に臨ませられ、ついで玉座に着かせ給
ふ。かくて三條内大臣、恭しく帝國憲法を獻りしに、陛

下には御聲うるはしく勅語を讀上げさせ給ふ。やが
て黒田内閣總理大臣、御前に進み出でしに、陛下には
御手づから帝國憲法を授けさせ給ふ。總理大臣跪き
て之を受け奉りし時は、滿場の群臣皆喜の色をあら
はせり。時に百一發の祝砲は盛に殿外に響きて、いと
勇まし。かくて再び君が代の奏樂起りしが、兩陛下に
は靜に入御あらせられぬ。

此の日、伊勢神宮、畝傍山及び月輪の山陵には、特に
勅使をたてさせ給ひて、其の旨を告げさせ給ひ、又岩
倉具視、島津久光、毛利敬親、山内豊信、鍋島直正、大久保

(四)内閣顧問官
明治十年薨
年四十四

大赦

(五)陸軍大將
明治十年兵を
擧げ敗死す
年五十一

(六)水戸の儒臣
東湖と號す
安政二年(二
五)の大地震に死す

(七)信濃の人
象山と號す
元治元年(二
五)に殺さる

(八)長州藩士
松陰と號す
安政六年(二
五)刑せ

九。らる。年二十

舞樂

利通、木戸孝允の墓にも其の旨を告げさせ給ふ。かくて大赦を行はるゝはさらなり、西郷隆盛の賊名を除き、正三位を贈らせ給ひ、藤田誠之進、佐久間修理、吉田寅次郎等には正四位を贈らせ給ひ、又全國八十歳以上の男女には金を賜ふなど、ひろき御惠のほど、いたり及ばぬところもなし。
かくて午後零時三十分、兩陛下には青山の觀兵式に臨ませ給ふ。其の行幸ををがみ奉らんと、御通輦の道には人を以て山を築けり。此の夕、百官有司に讌を賜ひ、夜に入りて舞樂などの御催あり。

腥き風
血の雨
和氣洋々

あはれ、他の國々にて憲法を發布するや、常に革命擾亂のあまり、腥き風を吹かせ、血の雨をふらするが例なり。さるを、君臣上下和氣洋々のうちに、かゝる大典を擧げさせられぬ。我々は多言せず、唯かゝるめでたき國體は、他にまたあるかを問はんのみ。

— 中等國語讀本 —

自修文

二九 おはやの失敗

おはやといひて、十四歳になる少女ありき。性質活潑にして愛らしけれど、何事にも物知顔する癖あれば、朋友等も、時には又例のと、顔見合する事もありき。

或頃、同級生打寄りて様々の物語し居たるに、其の中の一人思ひ出したる様に、

「きのふ芝公園の近所で、オートモビル製造所と書いてあるのを見ましたが、何でせう。どなたか御存じありませんか。」

といへば、何人もまだ口を開かぬに、おはやは直ちに答へて、

「それは、大友といふ麥酒の製造所でせう。」

といふに、人々、エビス、キリン等ならば耳慣れたれど、大友とは聞きたる事もなし。何ならんと評定し合へり。梅子とて常には寡言にして遠慮深き少女なりしが、餘りのをかしさに唯笑ひてあれば、人々何故ぞと尋ぬるに、梅子は、

評定
何だらうと話し合ふこと。
寡言
言葉ずくな。

Automobile

「私の思つてゐるのと違ふかも知れませんが、それはオートモビルではなくて、オートモビルではありませんか。若しさうなら、自動車のことでせう。お母さんから聴きました。」

といふに、一同

「あゝさうで御座いませう。先生に伺ふまでもない。梅子さんのお母さまなら間違なしです。」

とて、いづれも一つの學問をなしたりと喜びぬ。

おはやは此の時深く心に耻ぢて、これより後は物知顔する癖も止みたりとぞ。

三〇 佛蘭西の一老兵の子

昔、佛蘭西の片田舎に、年久しく軍隊生活を爲し、
 が、今ははや老朽なりとて、歸休を命ぜられたる兵士
 ありけり。年金の恩典も無かりけり。家には妻と三人
 の子供とあるに、老いたれば一家五人の口を飼する
 こと甚だ難く、はかなき浮世を歎き居たり。忤一人は
 兵學校に在學してありければ、何の不自由もなく過
 し得べきを、此の少年如何にしけん、食事のをりは唯
 粗末なる麵包と水とをのみ取るを常とせり。かくて、

歸休

恩典

口を飼す

月日を経るに、少しも變る處なければ、此の事いつし
 か元帥ドシュウスウル公爵に聞えぬ。公爵は此の少
 年を呼出して、事の仔細いかにと尋ねられけり。少年
 は少しも臆する所なく、男らしき剛毅の態度を以て
 對ふるやう、閣下よ、抑、我が此の王立の學校に入學を
 許可せられ、其の御保護にあづかるの名譽を擔ふに
 至りし時、父は我をば此處に伴なひ來れるなり。父と
 我とは途中唯麵包と水とにて饑を凌ぎつゝ、徒歩し
 來れり。父は我が收容せらるゝを見届け、我が幸福を
 祈りて我が村へと歸り行きけり。そも我が家に在り

剛毅の態度

閣下

收容

率直

し時は、一家皆唯黒き麵包と水とに漸く其の日其の
日を送り居しが、それすら容易の業にはあらざりき。
恐らくは、今も尙かくの如くならん。閣下よ、父母姉妹
のかくも哀なる境遇にあるを思はゞ、よし王より賜
はる物なりとはいへ、いかで我獨り美食に安んぜら
るべき。といふに、公爵は其の率直にして誠實籠れる
少年の言にいたく感動せられけん、小遣錢にとて若
干の金を少年に與へられ、尙父には年金下賜の事を
取計らふべしと約せられぬ。少年は深く公爵の厚意
を謝せしが、金は父に與へられたしと請ひければ、年

思顧

金許可の證と共に、やがて父の許に送られけり。爾後
此の少年は公爵の恩顧を受けて、終には佛蘭西軍隊
の良士官となりたりとぞ。
—澤柳政太郎、孝道による—

三一 安宅

坪内雄藏

先達
身を窶す

時しも頃は春の初、風まだ寒き北國路を、いたはし
や義経は、兄頼朝の疑をうけ、奥州さして落ちて行
く。主従僅かに十二人、辨慶を先達に、山伏姿に身を
窶し、日數程經て加賀の國安宅の港に着きにけり。
義いかに辨慶、旅人等の噂によれば、安宅には特

に關を設けて、山伏を嚴しく取調ぶる由、如何にすべきぞ。

辨「それはゆゝしき御大事なり。きつとこれにて御工夫あるべし。」

人々「いやく、何程の事かあらん。唯打破つて御通りあるべし。」

辨「いやく、打破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、成るべくは穩かなる手段を取りたし。」

義「然らば辨慶、ともかくも其の方の工夫に任せ

大事の前の
小事

ともかくも

強力



安宅(樂能)

ん、よろしく計らひくれよ。

辨「畏つて候。まづ考へ出したることは、我等かく山伏に身を窶せども、包み難きは我が君の御品格なり。畏れながら、暫く強力に御身を窶され、御笠深く召され、我等の笈を負ひて、わざと後にさが

つて御通りあれかし。さなくば忽ちに見出され候はん。

義義げにく、これは尤もの事なり。

姿を窺し、主従はやうやく關に近づきて、通らんとすれば、關の役人富樫左衛門、

富富やあく、山伏、關なるぞ。名をなのれ。

とぞ呼ばはりける。

勸進

辨辨承つて候。これは奈良東大寺建立の爲に、北陸道を勸進する山伏にて候。

富富それは殊勝の事なれども、山伏なるからは、此

の關は通し難し。

辨辨して其のいはれは。

さればなり

富富さればなり。賴朝、義經御不和により、義經殿には山伏と姿をかへて奥州へ落ちらるゝ由。故に諸國に新關を設けて、山伏をかたく止むるなり。一人も通し難し。

賈

辨辨承つて候。しかし賈山伏をこそ止めらるゝならぬ。まことの山伏を止め給ふ必要あらじ。

論より證據

富富あらむづかし。論より證據なり。まこと東大寺建立の勸進ならば、勸進帳のあるべき筈ぞ。こ

勸進帳

聽聞

こにてそれを讀上げられよ。某これにて聽聞せん。

辨何と、勸進帳を讀めとや、心得申して候。

あらばこそ

もとより勸進帳のあらばこそ。笈の中より有合の卷物一つ取出し、勸進帳と名づけつゝ、即智を以て

まことしやかに

文を綴り、まことしやかに聲高々と、天も響けと讀上げけり。富樫つくづく聞きすまし、

富最早疑晴れて候。御通り候へ。

辨かたじけなく候。

紅は園生に植ゑてもまざれなし

げにや、紅は園生に植ゑてもまざれなし。後にした

一期の浮沈

がふ強力を、富樫目早く見とがめて、

富いや、暫く。其の強力は通し難し。とまされ。

と罵りぬ。すは、我が君をあやしむは、一期の浮沈と

仰天

仰天し、皆一同に立ちどまる。

そらとぼけ

辨慶騒がず、そらとぼけ、

辨やい、強力め。何とて早く通らぬぞ。

富いや、それはこなたより止めたるなり。

辨そは又何故。

富あの強力が姿、義經殿に似たるゆゑなり。

奇怪千萬

辨奇怪千萬、義經殿に似たりとや。しかいはるゝ

憎さも憎し

金剛杖
打擲

強力めは、一生の名譽ならんが、さりとては腹
立たしや。けふのうちに能登境まで行かんと
思へばこそ強力を雇ひたるに、僅かの笈を重
げに負ひて、人々に後るればこそ貴人かとも
怪しまるれ。憎さも憎し。いで懲しくれん。
金剛杖をおつ取つて、さんぐくに打擲す。

これはと驚く人々を、辨慶目にて制しとめ、尙も激
しく打据ゑたり。富樫やうやく疑念を解き、

宣「これは我等が誤なり。其の強力には構なし。と
くとく一同御通りあれ。」

ほつと息

といふに人々ほつと息、毒蛇の口を逃れし思。さら
ばさらばと立ちあがり、關路をあとにしづくくと、
奥州さして下りけり。

— 國語讀本 —

ヒ首

三二 櫻花のヒ首

三百年の徳川の流の末濁りて、世の中騷然たりし
頃、かよわき婦人の身を以て、男々しくも正義の旗を
翻し、勤王の大節を唱へしもの遠近にあらはれたり。
松尾多勢子も其の一人なりけり。多勢子は信濃國伊
那郡の片田舎に住める農夫治右衛門の妻にして、身

大節

身も世もあらぬ
まづも坐つても
まづも坐つても
機密を探る
隠れたるより
顯るいはなし

自若

分賤しきものなりしが、一度正義の何物たるかを
知り、國家を憂へては、身も世もあらぬばかりに思ひつ
め、深く勤王の志士と交り、婦人の身の却つて人の油
斷もあるべしとて、窃に幕府の機密を探り居たり。
げに隠れたるより顯るゝはなしとかや。多勢子が
度々の江戸出府は、遂に幕吏の疑ふ所となり、一日討
手の向ひ來らんといふこと聞えぬ。多勢子聞きて少
しも驚かず、自若として靜に鏡に向ひて髪を解けり。
一味の人々、一刻も早く立退くべきよしを勧めしが、
多勢子却りて之を制していへるやう、事既に茲に至

捕吏

隱慝

れり。今は捕吏の來るを待ちて、潔く自刃せんのみ。取
亂しては耻辱なり」とて、更に衣服を着替へんとする
にぞ、人々心をいらだつるをりしも、品川彌二郎、渡邊
玄包等、駈來りて、強ひてこれを連出し、長州邸にかく
まひ、漸く事なきを得たりといふ。毛利敬親公、深く多
勢子の健げなる志をめでて、櫻花をちりばめたるヒ
首を賜へりとぞ。

其の後郷里に歸りて、尙脱走の志士を隱慝して、便
宜を與へしこと幾回なるを知らず。王政維新の世と
なりては、我が志も遂げられたればとて、餘生を東京に送

往生を遂ぐ

雲居の空

(一)昭憲皇太后

縮緬

(二)篤胤の嗣子。明治十三年没。年八十二。

言葉の林

途すがら
(三)近江にあり。

りて、明治二十七年といふに心安く往生を遂げたり。多勢子病死の事雲居の空までも聞え、(一)畏くも皇后宮より紅白の縮緬を賜ひて、其の志を賞せられたりと。いふ。亡靈いかに感泣したりけん。多勢子は幼き頃より和歌を好み、老いては平田鐵胤の門人となり、言葉の林ふかくわけ入りたりといふ。維新の時、京に上る途すがら、(三)鏡山を過ぎてよめる歌、

鏡山心のくまも晴れにけり

たちかへる世の面かけを見て

三三 雛祭の記

高濱 虚子

内裏雛

五人囃子

たとへんや
うなし

我が幼児は去年の三月に生れたり。今年は初雛なれば、せめて内裏雛のみにも購ひくれよ。一度購ひ置けば、此の兒の一生あるものなれば。など、母なる人の切に望むに、やがて内裏雛と五人囃子といふものぞ、我が兒の持物とはなりける。幼児よりも母なる者の喜たとへんやうなし。

奥の間の三尺の床に本箱を横たへ、机の抽斗(ひ)を重ね、三重ばかりの壇をしつらひて、例の内裏雛と五人囃子とを並べ祭るに、淋しげながらも目美しく、我は

ゆくりなく

ゆくりなくも、我が亡き親のこと慕はしく忍ばしくなりぬ。

調度

膳椀などの箱と共に、棚の上に並べられたる一つの箱には、鼻の缺けたる紙雛、手足の無きはふこ様、去年のお煎りの紙に包まれたる、小さき簞笥の壊れたるを、觀世捨にて括りたるなど、我はこれを雛様箱と呼びて、三月の節供が來れば、其の箱を直ちに臺として、其の上祭りにて樂しみしが、隣の家、美しきを見て歸りては、餘りに淋しく汚きに嫌らず、母上に訴ふれば、男の子のするものにあらずと叱られて、我に女

慥る

の兄弟無きことの情なく、果は我の女にあらぬことをさへ情なく覺えて、厚紙に金紙貼りつけ、之を雛の屏風なりとして、僅かに自ら慰めたる事など、今の如くに思ひ出でぬ。

かゝる所に、子規子の妹君より、髹人形を幼き者と送りこされたれば、五人雛子ばかりの淋しげなりしものも俄に引立ちて見え、それを内裏雛のいづれの側に置くべきかなど、三十近き男の詮議もをかし。

其の日の暮、簞笥、長持、両掛より鏡臺、茶簞笥、金盃、雪洞など、何れも美しく、新に壇を飾ることとなりたり。

(一)子規は伊人正岡常規の號。伊豫の人。明治三十五年歿。年三十六。

菱餅

三尺の廬

桃の花も生けられたり。菱餅も、お煎りも、白酒も供へられたり。やがて小さき雪洞に灯とも點すに、雛の顔さへ光を増して、桃の花も俄に咲競ふかと覺え、五人囃子の鼓の音も、今か響き出づらんと樂し。幼き者の喜、母なる人の喜、さては髯男の我が喜、春色、俄に三尺の廬に充滿ちたるが如し。

唯手足の無き古びたるはふこ様を此處に並べ見ぬことの、物足らぬやう覺えしは如何なる故にかあるらん。

ふるさとの雛戀しき都かな。

—寒玉集—

自修文

三四 汽車の旅(三)

京都に滞たぎ在して東山、西山の名所舊蹟をあちらこちら見物し、^(一)桃山の御陵に參拜して九州へ向つた。大阪は一日間見物、神戸で數時間を費した。大阪では商工業の繁華な有様に驚いて、昔の仁徳天皇の御代をおもひ、^(二)神戸では湊川神社に參拜して、嗚呼忠臣楠子之墓を拜み、^(三)吉野朝の昔をしのんだ。

神戸からの鐵道は山陽線で、海岸に沿うて奔る所が多いので、風景のよい事はどの線路も及ぶまいと思はれる。神戸を離れると、須磨から舞子、^(四)明石の浦々、淡路島は目の

(一) 明治天皇、昭憲皇太后の御陵。

(二) 仁徳天皇は此の地に都せられた。

(三) 別格官幣社。楠木正成を祀る。

(四) 足利尊氏の亂に、後醍醐天皇、御村上天皇などの大和國吉野に居ら延れた時の朝。

(五) 播磨國明石郡。

(七) 淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に、幾夜寝ざめぬ須磨の關守。(金葉集源鏡昌)

(八) 一ほの浦の朝霧に、鳥がく朝れ行く船をしぞ思ふ。(古今集、讀人不知、小野篁の詠)

(九) 播磨國。

(五) 播磨國赤穂郡。

(二) 備前國。



岡山縣廳の所在地岡山には知合の人もあつたが、下車す

城 路 姫

前(七)に近く、幾十百の白丸が靜な波の上に浮んで居る。淡路島かよふ千鳥」と歌つたり、
 島のほとと明石の浦の(八)と歌つたりした風情も自らしのばれる。姫路(九)の城は近頃立派に修繕されて、此の道中の一美觀である。眞白な城で、昔から鷺城といふ名があつたさうである。四十七士の故郷赤穂(五)は、那波といふ驛の南三里に在る。

泉石
 泉水庭石、
 (三)元は舊藩主の別荘地。明治四年に公園となる。

(三) 備後國御調郡。

鹽田
 しほをつくる所。しほたとも、しほはまともいふ。

(四) 上古、備前、備中、備後を總稱して吉備國といつた。

る暇は無かつた。こゝの後樂園(三)は泉石(四)の美を以て聞えて居る。尾道(三)あたりで再び瀬戸内海が見えて、右は山、左は海、どちらを見ても美しい景色である。鹽田(五)といふものも此の旅で始めて見た。こゝらの驛々で吉備團子(六)を賣りに來るが、これは昔の國の名に因んだのであらう。桃太郎の生國といふ譯では無い。岡山縣から廣島縣へかけては疊表の産地で、花筵の産出も夥しい。

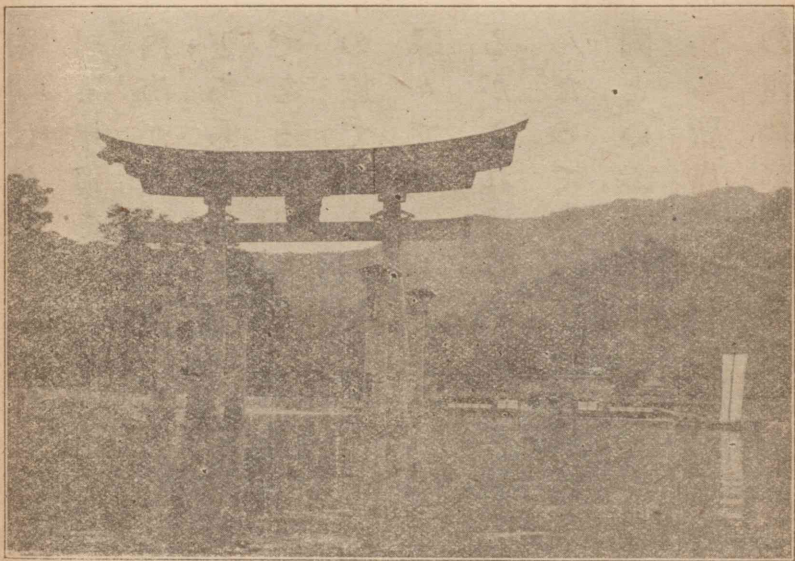


港 品 宇

(一五) 安藝國。

(一六) 日清、日露
兩役には専ら
軍隊出發地と
なつた。
(一七) 第二海軍鎮
守府所在地。

(一八) 安藝國佐伯
郡。島に官幣
社殿島神社
がある。



島 殿

(一五) 廣島は中國第一の都會で、縣廳の所在地、日清戦争の時、明治天皇はここに大本營を置かせられたのであつた。近くに宇品や吳など軍事上大切な港がある。
間も無く又も瀬戸内海が現れて、日本三景の一巖島を汽車の窓から眺めた。海の中の大鳥居も、其の後に列る社殿も

(一九) 光線の作用で地上の物が空中にうかんで見える現象。
(二〇) 周防國。

(二一) 馬關ともいふ。

(二二) 官幣中社。

夢の様に浮んで、話に聞く(一九)蜃氣樓とはこんなものかと思つた。岩國といふ所は有名な錦帶橋のある所。こゝはもう山口縣で、山口縣廳所在地の山口は、小郡驛から支線で行くのである。下關(二〇)は本州の西端、内海の入口で、安徳天皇を祀り奉つた赤間宮(二一)がある。神戸を出ると一の谷の古戦場があり、こゝに着いて平家一門の亡びた壇浦を見るのは、歴史の上を旅して居る心地がする。下關の向岸は九州の門司である。

三五 ビールとマリブラン 其の一

落合直文

(London. イギリスの首府。世界最大の都會。)

(Piere. フランスの人。)

家道日に衰ふ

まめやかに

ひまあり

(一) ロンドンの貧民窟と呼ばれたる町はづれの怪しげなる破家(あばら)の一間に、母とともに住める一少年あり。名をピール(二)といふ。もとより貧しきが上に、母は長く病床にありて、起臥も自由ならず。我が身はまだ幼くて、何の職業に就かん由もなかりければ、家道日に衰へゆきて、今はいかにもすること能はざるに至れり。されどピールはこれを苦しと思はず、まめやかに母の看護をつとめ、ひたすら其の恢復を祈れり。

今日は早一錢の貯もなくなりぬ。ピールは朝より一片の麵包をも味はで、母の側にあり。病少しひまあ

心細さととめ難し

(Mulhbran. 女史)



史女ンラブリマ

りと見えて、母は今安き眠に入りぬ。ふと見れば、枕頭の薬既に盡きたり。我が飢はともかくも、母に進むべき薬をいかにせんと思へば、ピールはいと心細さのととめ難きを覚えぬ。ピールは涙ぐみながら立上りて、窓に倚りつゝ、外面の方を眺め居たりしが、やがて彼方より、旗差上げ、喇叭と太鼓とを鳴しつゝ、音樂會の廣告をふれ來る者あり。聞けば、マリブラン(三)女史といふ當代に名高き

唱歌師の、今宵さる處にて新曲を歌ふべしといふ廣告なりけり。

一枚摺

物心づく

こゝにピールはふと、去年マリブラン女史の歌ひし或小歌の一枚摺が、何萬枚ともなく賣行きしことを思ひ浮べぬ。ピールは物心のつきし頃より、早くも音樂の樂みを覺えて、はては、何とも分かぬ小歌など、折々作り出でたる事もありしが、此の頃も母の病床に侍して、看護のかたはら、一つの小歌を作り出せり。ピールは今其の小歌を見つゝ、あはれ若しも之を彼の女史の歌ひくれなば、書肆も争ひて買ひもやせん。

飢を醫す

一面の識

黙禮

しかあらば母の藥も心にまかせ、我も亦飢を醫することを得ん。女史にはもとより一面の識もなけれど、ひたすらに請願は、などか許されぬ事のあるべきと思ひせまりては、子供氣のなか／＼に止めんよしもなく、急ぎ筆を走らせて、我が小歌を書改め、安らかに眠れる母に黙禮しつゝ、街頭に出行きぬ。

三六 ピールとマリブラン 其の二

落合直文

マリブラン女史は、とあるホテルの一室に憩ひ居

刺を通ず
隠する色な

ほがらか

たりしが、見も知らぬ幼童の訪れ来て、刺を通ずるあり。見るから愛らしき十歳ばかりなる幼童、隠する色もなく、靜に女史の前に進みて一禮せり。かくて彼はほがらかなる聲にて、「我が母は久しく病煩ひて、今はアヤカサレユト薬を買ふべき錢すらも盡きぬ。此のはかなき我等を憐み給は、願はくは御身此の歌を歌うて給はらずや。さらば我は書肆に頼み、一枚摺となして、それを賣歩かんと思ふ。」とて、一枚の紙の卷きたるを出しぬ。

面持

女史はそとそを取上げて黙讀し居たりしが、やがて驚ける面持にて、ピールの顔をうちながめ、「こそそ

うなだる
いとほし
心あきなく
なにくれと

なたは作れりとや」といひぬ。さて幾度か讀返しつゝ、「こはまことに見事なる作なり。わらはは今宵必ずこそ歌ふべし。そなたも來りて、わらはの歌ふを聽かれよ」といへば、ピールはうなだれて、「そは嬉しけれど、母の一人にてあらんがいとほしくて」といふ。母君の方へは、わらははより物慣れたる看護婦を送るべし。心おきなく來よ」とて、女史はなにくれと勞り慰め、若干の金子と音樂會の入場券とを與へしに、ピールは夢かとはかりうち喜び、母にさゝぐべき薬、食物など買集めて、家に歸りぬ。

幔幕

反映

演奏

今日の事どもを母と語らふほどに、やがて看護婦も來りしかば、ピールは音樂會へと急ぎぬ。まばゆきばかりに磨き上げたる舞臺に、金絲の幔幕張渡したるが、さまざまなる電燈の光に輝きて、其の間に立雜れる人々の衣服の上に反映せるなど、かゝることに眼なれぬ。ピールは、唯驚くばかりなりき。

幕の開くとひとしく、賑かなる奏樂起れり。數番の演奏終りし後、マリブラン女史は拍手の聲に迎へられて、靜に場に上りぬ。ピールは思はず慄ひ始めぬ。女史は一禮して、徐に歌ひ出せり。そはまことにピール

水を打ちたる如く

寂として人なきが如し

拍手の聲雷の如く起る空ゆく心地

の歌なりけり。高く、低く、緩く、はやく、あはれに移りゆく唱歌の曲のゆかしさ。満場さながら水を打ちたるがごとく、聽衆の眼にはいつか涙浮びぬ。曲は終れり。満場なほ寂として人なきが如し。やがて拍手の聲、雷の如く起れり。

ピールは會場を出でて家路に向ひしが、唯空ゆく心地して、踏む足すらも定かならず。一時は書肆の事をも思ひ浮べねば、又母の事をも打忘れたり、あまりの嬉しさに。

翌朝マリブラン女史はピールの家に訪れ來り、昨

夜の歌をば或書肆の三百磅サウンドに買ひたりとて、其の金子を悉く與へぬ。母は唯涙の外に、謝することばもなかりき。

ピールは長ずるに隨ひて、益々作曲の妙を得、後遂に名高き作曲家となれり。マリブラン女史の、ロンドンにて病みて死なんとせしをり、始終其の枕邊にありて兄弟も及ばぬ看護を盡し、は、此のピールにてありきとぞ。

—中等國語讀本—

三七 品性と常識

大隈 重信

(一)明治天皇。

御製

大空にそびえて見ゆる高嶺にも

のぼればのぼる道はありけり

品性は人を成す。たとひ絶大の天才を有し、學問また究めざる所なしと雖も、其の品性にして崇高ならざれば、其の人は未だ以て全しと稱するに足らず。才學は末なり。品性は本なり。本を忘れて末に馳せなば、人はたゞ學藝の器械たるに過ぎざるべし。

品性は良習より來る。能く學問を咀嚼し、經驗を積み、以て智を明らかにし、徳を磨き、正義を尊重し、趣味

咀嚼

自主獨立

を高尙にし、思想を堅實にし、また同情の念を深くし、英氣を養ひ、而して自主獨立の人たらんことを期し、務めて之に習熟せば、乃ち高大なる品性を成すを得べし。

常識

中庸に則る

指針

形式に泥む

偏狹

また人に重んずべきものは常識なり。常識は善を善とし、惡を惡とし、中庸に則り、公平なる辨別を下すものにして、人生の確實なる指針なり。常識なくんば、徒らに形式に泥み、空理に流れ、又愛憎の念に驅られ、境遇に役せられて、偏狹の習性となり、遂には是非の心を失ひ、人と交るに信なく、世を渡るに過多し。

身を修め家を齊ふ

氣宇

我が祖先は今日の進歩せる學問技藝を知ること能はざりしなり。我が祖先は立憲帝國の恩澤に浴すること能はざりしなり。然るに尙善く常識を有し、品性を具して、身を修め、家を齊へ、君國に盡し、以て日本民族の雄志美德を發揮したるにあらずや。我等生れて此の盛運に遭ひ、智徳ともに祖先に優らんことを務むるは、是即ち子孫たるの孝義なり。若し品性陋しく、氣宇小にして、利己に奔り、虚名を悦び、公私の道を誤りなば、上は先帝の遺訓に悖り、下は祖先の遺徳を傷つけ、啻に大日本帝國の品位を害ふのみならず、ま

朴	概	槁	楫	棕	案	柿
樸	槩	槁	楫	椶	椶	椶
瞎	狸	猪	無	烟	温	汙
覩	狸	貉	无	煙	温	汚
紕	糾	粽	笄	筍	競	稿
紕	糾	糶	笄	筍	競	稾
花	艚	舩	羈	羈	縑	縑
華	櫓	船	羈	羈	縑	縑
踪	谿	諱	訛	枉	虱	蔭
蹤	溪	嘩	譌	枉	蝨	蔭
駟	雞	雁	陰	鏹	銜	遁
驅	鷄	鴈	陰	鏹	銜	遁

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中*標ヲ附シタル文字ニ限り、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

體 巨 互

ワタル。「連互」
 柜ニ同シ。
 笨ニ同シ。アラシ、麓、粗。
 カラダ。

絲 糸 缺 欠 鎗 槍 改 改 擔 担 託 托 姫 姬 壺 壺

ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。
 ツ、シム。
 ヒメ。
 拓ニ同シ。オス、ヒラク。
 ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。
 ハラフ。又アグ。
 ニナフ、カツア。
 鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
 アラタム。
 ヤリ。
 罽ニ同シ。鐘ノ聲ノ形容。
 アクビ。「欠伸」
 カク。「缺席」
 ホソイト、細絲。
 イト。

商 商 后 後 臺 台 刺 刺 協 協 胃 胃 僭 僭 但 但

タラシ、タロ。「但馬」
 ツタナシ、拙劣。
 ミダリガハシ、狼。
 身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
 カブト、兜。「甲冑」
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「胃裔」
 カナフ、叶。
 オビヤカス、脅。
 サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ「ノ上ニ添フ。「台贊。台臨」
 ウテナ、グイ。
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
 キミ。「皇后」
 アキナヒ。
 モト、本。

撰 選 迄 迄 豊 豊 証 證 詔 詔 諭 諭 蟲 虫 羨 羨

支那ノ地名。
 ウラヤム。
 魚介類ノ總稱。又マムシ也
 シム。
 ワビ、ワブ。「詭狀」
 訕ニ同シ。アザムク。
 ヘツラフ。
 ウタガフ、樂。
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。
 禮ノ古字。
 ユタカ。
 マデ。
 ユク、行。
 エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

卻^{ダキ} 卻^{キヤク} 鍛^{ダシ} 鍛^カ

シヨロ、鑄。
シヨロ、鑄。
シヨロ、鑄。
シヨロ、鑄。

宛 字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

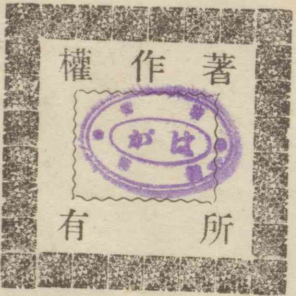
おぼつかなし 覺束なし
かひ (詮の意) 甲斐
きつと 屹度
さすが 流石、遠
しまふ 仕舞ふ
だけ 丈
だめ 駄目
ちやうど 丁度
ちよつと 一寸、鳥渡
でたらめ 出鱈目

とうく
とかく
とて、とても
とにかく
なかく
ふるまひ
はかなし
ほんたう
むだ
むづかし
やたら
やはり
到頭
兎角、左右
迎
兎に角
中々、々却
振舞
果敢なし
本當
無駄
六ケし
矢鱈
矢張

附 録 終

大正六年十月廿七日印
大正六年十月三十日發
大正七年一月十六日訂正再版印刷
大正七年一月十九日訂正再版發行

定價	女子國文
卷一、二、三、四金參拾九錢	大臨卷一、二、三、四金六拾六錢
卷五金參拾八錢	正時卷五金六拾五錢
卷六金參拾七錢	九時卷六金六拾參錢
卷七、八金參拾八錢	年度卷七、八金六拾五錢



著 者 芳 賀 矢 一

發 行 者 兼 印 刷 者 東 京 市 神 田 區 裏 神 保 町 九 番 地 合 資 會 社 富 山 房

代 表 者 合 資 會 社 富 山 房 社 長 坂 本 嘉 治 馬

印 刷 所 東 京 市 神 田 區 中 猿 樂 町 十 七 番 地 中 外 印 刷 株 式 會 社

發 行 所

東 京 市 神 田 區 裏 神 保 町 九 番 地

合 資 會 社 富 山 房 長 電 話 神 田 三 〇 一 四 神 田 三 七 六 〇 番 振 替 口 座 東 京 五 〇 〇 一

